とあるチートな上条当麻【更新停止】

hiradai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるチートな上条当麻【更新停止】

【Ｎコード】
Ｎ１７０８Ｐ

【作者名】
ｈｉｒａｄａｉ

【あらすじ】
インデックスが上条当麻の家にくる数年前、上条当麻がまだ中学生だったころ、上条当麻は学園都市のＬＥＶＥＬ５のうち、一方通行・未元物質・原子崩し・心理掌握・完全空間移動の５人を集めてチームを作っていた。しかし、上条当麻はその５人の目の前で精神を壊され、二度と目を覚ますことはないと判断された。それによって、チームはバラバラになった。そのため、三ヶ月後に目を覚ました上条当麻は、誰とも連絡をとれなくなっていた。そして、インデックスの登場によって物語は動き出す。

登場人物設定（前書き）

この話は主人公最強設定です。苦手な人は気をつけてください。
初めて書く作品なので、おかしいところがたくさんあるかもしれませんが、よろしくお願いいします。

登場人物設定

登場人物設定

主人公

上条当麻・・・最強設定。いつも両腕に包帯を巻いており、その包帯の仕掛けによって普段は力を封印している。右手のイマジンブレーカーで左腕の包帯をはずすことによって両腕の封印がとける。左腕に宿っている能力は、すべての超能力と魔術を使うことができる力で、超能力は最大でレベル(究極能力)９まで使える（変更の可能性あり）。右腕の能力は、イマジンブレーカーの拡大版。離れたところをピンポイントで効果範囲にしたり、効果範囲内の指定した能力だけ打ち消したり、指定した能力以外を打ち消したりできる。身体能力も異常に高く、聖人を超えているため、普段の状態でもたいていの相手には勝てる。

暗部組織「マジック」・・・当麻が作ったチームでレベル５ばかりで構成されている。構成員全員が、当麻から魔術のことを教えられている。

アクセラレータ・・・当麻の昔からの親友で、自分の能力のせいで怖がられてきたため、正義を名乗ることをあきらめ、一流の悪党を名乗っている。ＡＩＭ拡散力場のコントロールによる黒い翼を完全に操ったり、魔術のベクトルも操作できたりと、原作よりも強くなっている。

神童沙由理（しんどう　さゆり）・・・オリジナルキャラ。レベル５の第５位心理掌握（メンタルアウト）。当麻に強い好意を抱いている。当麻直伝の体術を使い、身体能力も高い。普段は自分の能力の影響で、範囲内にいる人間の心の声が聞こえる（自分の意志でオフにすることはできない）が、当麻が範囲内にはいると力場が壊され、何も聞こえなくなる。それを利用して当麻を捜すときもある。戦闘時は相手の脳を洗脳して動作を操る。そのため、一対一の対人戦闘なら第二位をも上回る。

炎道皐月（えんどう　さつき）・・・オリジナルキャラ。レベル５の第六位完全空間移動（パーフェクトテレポーター）。ムーブポイントと同じく、触れなくても物をテレポートできる。その上テレポートの距離も重量も際限がなく、空間移動系では最強の能力者。実際はレベル５の二番手に当たるが、学園都市の機密事項にされているため、影の薄い第六位の位置に置かれている。ちなみに、物の位置さえ分かっていれば、地球の裏側にある物をテレポートさせることも可能である。そして、空気や炎、電撃などどんな物でもテレポートさせることができる。

その他、「マジック」には垣根帝督（ダークマター）と麦野沈利（メルトダウナー）もいる。

登場人物設定（後書き）

話のなかに原作と比較するような文章が出てきたり、オリジナル設定が多くなったり、文章が下手だったりしますが、どうかよろしくお願いします。

物語の序章

実力を隠して生きている当麻だが、補修を逃れるていど成績は確保しているため、原作のように補修にかり出されたりはしていなかった。朝早くに起床し、散歩でもしようと思っていたら、ベランダになにかが干されてあるのが見えた。当麻が布団を干した記憶はない。不審に思い、ベランダに出てみると修道服をきた少女がほされていた。

「はぁ！？」

とりあえずご飯を食べさせて話を聞いてみた。

「私の名前はインデックス。悪い魔術師にねらわれてるの」

インデックス。当麻はこの名前に覚えがあった。イギリス清教の魔術組織「必要悪の教会」に所属し、１０万３０００冊魔道書を記憶している魔道書図書館だ。

「魔術師・・・か。この街の連中で魔術が存在することを知っているのはほんの一部だ。お前は運がよかったな。俺はこの街では魔術のことを1番よく知っている」

「それじゃあ、教会まで案内してくれる？」

「教会は、学園都市の外にしかない。だから、いくのは夜になってからだ」

当麻にとって人を助けるための行動に「ＮＯ」という選択肢はな

いので、すでに教会へのいきかたの話になっていた。そのため、インデックスは一瞬会話についていけなかったが、そのセリフが肯定の意志を示していることを理解して喜んだ。

当麻VSステイル

昼過ぎ、昼食をファミレスですませた後、寮にもどると一人の神父が部屋の前に立っていた。

（こいつは、ネセサリウスの若き天才魔術師、ステイル＝マグヌスだな。インデックスをひきとりにきたのか？）

「なにがねらいなの、魔術師！！」

「あれ？こいつはお前の味方じゃないのか？」

「違うよ、こいつ等は敵。私のもつ１０万３０００冊の魔道書をねらってるの」

（そういえば、こいつはさっき1年前からの記憶がないっていってたな。・・・なにか裏があるな）

「きみ、おとなしくその子を渡してくれるかな」

「嫌だといったら？」

「力ずくでいかせてもらうよ」

二人の間に緊張が走る。そして、ステイルが口を開いた。

「Ｆｏｒｔｉｓ９３１」

「魔法名か」

それを合図に、二人は動き出す。

「炎よ、巨人に苦痛の贈り物を」

顔をかばった両手の向こうで、魔術師は笑っていた。
ステイル＝マグヌスは笑いながら灼熱の炎剣を横殴りに上条当麻へたたきつけた。
それはふれた瞬間にカタチを失い、まるで火山の奔流のように辺り構わず全てを爆破した。熱波と閃光と爆音と黒煙が吹き荒れる。

「やりすぎたか、な？」

まさしく爆弾による爆破事件を前に、ステイルはボリボリと頭をかいた。一応、辺り一帯の人の出入りはチェックしている。夏休み初日の男子寮ということでほとんどの住人は外に出払っていた。が、友達のいない引きこもりがいるとなるとすこしやっかいになる。

眼前は黒煙と火炎のスクリーンに覆われている。だが、いちいち見なくても分かる。今の一撃は摂氏３０００度の炎の地獄だ。人肉は２０００度以上の高熱では、「焼ける」まえに「溶ける」らしいから、飴細工のようにひしゃげた金属の手すりと同じく、学生寮の壁に吐き捨てたガムのようにべっとりこべりついていることだろう。インデックスがあの少年から離れて立っていてくれて助かった。そう思い、インデックスを追いかけるためにその場から立ち去ろうとして、最後に言った。

「ご苦労様、お疲れ様、残念だったね。ま、そんな程度じゃ１０００回やっても勝てないって事だよ」

「誰が何回やってもかてないって？」

ギクリッ、と。炎の地獄の中から聞こえてきた声に、魔術師の動きが一瞬で凍結する。轟！と辺り一面の火炎と黒煙が渦をまいて吹き飛ばされた。まるで、火炎と黒煙の中央でいきなり現れた竜巻が全てを吹き飛ばすように。上条当麻はそこにいた。

当麻VSステイル　２

飴細工のように金属の手すりはひしゃげ、床や壁の塗装はめくれあがり、蛍光灯は高熱で溶けてしたたり落ち・・・・・・・そんな炎と灼熱の地獄の中、傷一つ無く少年はそこに佇んでいた。

吹き飛ばされた真紅の炎は、完全には消滅しない。まるで上条を取り囲むように、綺麗な炎を描いてジリジリと燃え続けている、が。

「邪魔だ」

一言。摂氏３０００度の魔術の炎に上条の手が触れた瞬間、全ての炎が同時に消し飛んだ。まるで、バースデーケーキに刺さったろうそくをまとめて吹き飛ばすように。

「なっ」

ステイルは目の前の理解不能な現象に危うく一歩後ろへ下がるところだった。インデックスも当麻の後ろで唖然としている。

周囲の状況をみれば、先の一発が不発だったとは考えられない。だとすれば、あの少年は生身の体で摂氏３０００度を受け止めるほどの強度があるのか？いや、それはもう人間ではない。

上条当麻はステイルの混乱など気にも留めない。

熱を帯びる右手を岩のように強く握りしめながら、ステイルの元へ、一歩

「チッ！！」

ステイルは右手を水平に振るう。生み出される炎剣を同じように、勢いよく叩きつける。けれど、火炎と黒煙が吹き飛ばされた後には、やはり上条当麻は同じように佇んでいる。

・・・・、まさか。魔術を？

ステイルは口の中で呟いたが、即座に否定する。

上条当麻はもうステイルの目の前まで歩いてきている。あと一歩踏み込んだだけで、殴りかかれるほど近くまで。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

ステイルの全身から嫌な汗が噴き出した。目の前の夏服を着た生き物が、人間のカタチをしているからこそ。その皮の中には、血や肉ではなくもっと得体の知れないドロドロした何かが詰まっているような気がして、ステイルは背骨が震えるかと思った。

「それは生命を育む恵みの光にて、邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力となせ！！」

当麻はステイルの魔術を見て、ニヤリと口元をつり上げた。

「イノケンティウスか。用意不足だな。ルーンを張っている範囲が狭すぎて、ちょっと逃げただけでこっちの勝ちになる。・・・あと、

紙にルーンを書いて張っているようだが、もし水性のインクを使っているのならスプリンクラーの水でルーンを消せるぞ？」

そう言い終わると同時にスプリンクラーが発動した。

「な！？貴様、何をした！！」

「こんなボロい寮のスプリンクラーの作動システムくらいいつでも乗っ取れるっての」

当麻は、そのセリフと同時にイノケンティウスを消し飛ばした。

「そんなバカな・・・」

「今なら見逃してやる。とっとと失せろ」

その言葉に、ステイルは悔しそうにうめいたが、かなわないと判断し、逃げていった。

当麻VSスティル　２（後書き）

スプリンクラーの遠隔操作なんて多分むりですよね。少しずつ、つっこみどころが増えていく気がします。

当麻ＶＳ神裂（前書き）

「ＶＳ」といいつつ、ほとんど話し合い・・・

当麻VS神裂

その後、当麻はインデックスにイマジンブレイカーの説明をした。
そして、戦当時にさりげなく守っておいたおかげで無事だった自分の部屋でのんびりとして、夜には夕食の材料を買いに外に出た。
外を歩いていた当麻は途中で違和感を感じた。
(これは、人払いのルーンか。まあ、インデックスのいないところで話をしたいと思ってたし、ちょうどいいかな)
当麻はそう考えて敵が居るであろう場所へと向かっていった。

「で、今度は聖人の神裂火織かよ。ステイルはインデックスの方にでもいったか？」
当麻が第一声で名前を言い当てたことで、神裂の警戒心が高まった。
「あなたはいったい何者ですか？ステイルが彼女の回収に向かっていると分かっていてもやけに冷静ですし」
「俺は学園都市では一番魔術について詳しいんだよ。インデックスの回収については、問題ないだろ。なあ、インデックスと同じネセサリウス所属の神裂さんよぉ」
「っ！！何故そのことを！？」

「言っただろう？『俺は魔術に詳しい』って。有名の魔術組織や魔術師は全て知ってるよ。それで、事情を説明してもらいたいんだが」

当麻のそのセリフに、神裂は少し考え込んでから答えた。

「完全記憶能力、という言葉に聞き覚えはありますか？」

完全記憶能力、ほとんどは体質のようなものだが、努力でこれを身につけた人間が、当麻の知り合いに数人いる。

「ああ、インデックスが１０万３０００冊の正体だろ？」

神裂はうなずいてこう続けた。

「アレは、紛れもなく天才です。扱い方を間違えれば天災となるレベルの。教会が彼女をまともに扱わない理由は明白です。怖いんですよ、誰もが」

大きな力を持つだけで恐れられ、正義を名乗ることとわあきらめた少年を当麻は知っている。常に力を隠し続けている少年達もいる。だから、当麻にとって「力がある」という事実だけで人を恐れるということは何よりも許せないことだった。

「それでも、あいつはただの人間だ。危険思想を持っている訳でもないのに、力があるだけで怖がったりまともな扱いをしないなんて、絶対に間違ってる」

その言葉に、神裂は頷く。

「そうですね。・・・ですが、その一方で、現在の彼女のスペック

は凡人とほぼ変わりません」

「どういう意味だ？」

「彼女の脳の８５％は禁書目録の１０万３０００冊に埋め尽くされてしまっています。残りの１５％は一年間の記憶で埋め尽くされてしまうので、彼女の記憶を1年ごとに消していかないと脳がパンクしてしまうんですよ」

当麻は唖然として、口を開く事ができなかった。事実の深刻さではなく、あまりのばからしさに。

「結局、魔術側も科学側も変わらないってか」

当麻ＶＳ神裂　２（前書き）

まだたたかわない・・・

当麻VS神裂　2

「?あなたは何を言っているのですか?」

訝しむ神裂にかまわずに当麻は続ける

「科学者は魔術の存在を否定し、魔術師は科学を胡散臭いものとしか思っていない。おまえ、インデックスの脳の話を聞いたときに脳科学を少しも調べなかっただろう?」

「・・・それがどうかしましたか?」

未だに何が言いたいのかつかめていない神裂は不機嫌そうに答えた。

「そもそも、完全記憶能力ってなんだと思う?」

そんなの調べるまでもなく分かることだと思った神裂は自信満々に答える。

「一度見たものを絶対に忘れない能力です。だから、普通の人のように『いらない記憶』を忘れて脳を整理することができないから脳がパンクしてしまうんです」

そう言い切る神裂に対して、当麻は首を横に振った。

「違うな。正解は、『自分の記憶を完璧に取り出すことができる能力』だ。そもそも、人間の記憶は一生消えずに残るものだからな」

「何をバカな。それじゃあ、あなたは一年間なにを食べてきたのか、一つ残らず思い出せるのですか？」

「そんなどうでもいいことは忘れたに決まってんだろ」

「ほらみなさい。なにが『人間の記憶は一生消えない』ですか」

「でも、どうでもいいことをふと思い出すことだってある。なぁ、そもそも『忘れる』ってどういう事だと思う？」

「さあ、考えたこともないですが・・・」

「忘れるっていうのは、その記憶が取り出しにくくなっているってことなんだ。そもそも何かを思い出したりするのは、脳の神経回路を電気信号でやりとりして脳細胞から記憶を取り出してるんだ。『どうでもいい記憶』はそのやりとりの回数が少なくなるから神経回路が衰えて思い出しにくくなるんだ」

「待ってください。使わないと衰えるだなんてばかげています」

「筋肉も使わないと衰えるし、しばらくやってなかったことをしてみたら以前より衰えているだろ？」

「あっ・・・」

「で、続きだが、そもそも人間の記憶が完全に消えることは、細胞そのものが破壊されない限りはあり得ない。だから、いくら完璧に全てを記憶していてもそれで脳がパンクするなんてありえない。だいいち、暗記と日常の記憶とでは使っている脳の部分が違うかららいくら魔道書を暗記したところで関係ないし。だいたい、１年で１５

%だなんて、どうやってその数字をだしたんだ？それだと完全記憶能力者は七年も生きられないぞ」

神裂はショックをうけた。自分たちがやってきたことが根本的な部分から間違っていたのだから。

「・・・ですが、記憶を消す直前になると、いつもあの子は苦しそうにしていました」

「ネセサリウスは、インデックスをまともに扱っていないんだろ？なら、インデックスの体に術式でも組み込んでいるんじゃないか？」

「なるほど・・・。確かに、あなたの言いたいことは分かりました。ですが、そんな不確かなものに頼る気はありません。あの子の記憶を消せば、とりあえず確実に助けることができます。ですので、あなたがこの私に勝つことができればあなたを信じて任せましょう」

「まあ、そりゃそうか。いいぜ、うけてたつ」

当麻ＶＳ神裂　２（後書き）

なんか変なところで区切ってばかりですね。区切り方がまだよく分かりません。

決着

二人の間に緊張が走る。

「Ｓａｌｖａｒｅ０００」

「はっ、魔法名か」

当麻が間合いをつめようとして駆け出すと、七つの斬撃に襲われた。

「ちっ、七閃か。・・・相手が聖人ともなると、こっちもレベルをつり上げるしか無いよな」

当麻は、いつも両腕に包帯を巻いている。左腕の包帯は異能を封印し、右手の包帯は幻想殺しの力を最低ラインまで下げている。

当麻は、右手で左の包帯をなぞった。すると、両腕の包帯がはずれた。そして、当麻の体が薄い光の膜で覆われた。

「なっ！？何ですかその技は」

「危ないから押さえ込んでいた力を解放しただけだよ」

当麻は一瞬で間合いを詰めて神裂を殴り飛ばした。

「くっ！！」

「ちなみに、力を封印した状態でも運動能力は変わらないぜ。さっきは本気で走らなかっただけだ。５才の頃から血反吐はきながら努力したからな」

神裂はこれが能力を使わなくてもできるということに驚いた。おそらく、本気をだせば、能力を解放しなくてももっと速いのだろう。

それからの勝負は一方的だった。最早勝負と呼ぶのもためらわれるほどに・・・。

神裂一緒に寮に戻っていると、ステイルが居たので、事情を説明して拾っていった。そして部屋に戻ると、インデックスが待っていた。

インデックスが騒いだので事情を全て説明してた。そして、イマジンブレイカーの力を完全解放して、のどの奥にある魔法陣に、手で直接触れることなくピンポイントで魔法陣を打ち消し、教会側が作った防御システムも打ち消して全てが解決した。

実は、当麻の力を使えばインデックスが無くした記憶を戻すこともできたのだが、インデックスの罪悪感が大きくなるので、当麻はそれをあえて話さなかった。

神裂とステイルは、一応数日間様子を見てから帰った。『首輪』が無くなったインデックスは危険視されたので、とりあえず当麻が預かることになった。

決着（後書き）

第一章完結です。ここからが本番、しばらくインデックスが出てきません。「マジック」がメインになる予定です。

完全空間移動

当麻はよく散歩をする。それは、単純に散歩が好きでやっている訳ではなく、暗部時代から情報収集のために暇なときは適当にそこら辺を歩いているというものである。

「しっかし、誰にも会わないもんだな・・・」

まあ、レベル５の連中で暗部を知らないのは第三位であるビリビリの御坂美琴ぐらいだが、第五位である心理掌握の神童沙由理や、第六位（六位とされているのはカモフラージュで、本来は二番手に位置する）である完全空間移動の炎道皐月はおそらくだが、現在は暗部に所属していない。アクセラレータも多分暗部にはいないだろうが、それに近い位置にいる可能性が高いので出会う確率は低い。沙由理はまだ中一だし、皐月は当麻以外の指示は聞かないので、そこら辺に居る可能性は高い。ちなみに、沙由理については、常盤台中学校にいると分かっているが、当麻がその近くまで立ち寄ると不審者扱いされるので探しにはいけない。

とりあえず、銀行で現金を卸そうと思い立ち寄ると、当麻が入った瞬間に強盗に遭った。

「・・・とりあえず、様子をみるか」

そう思った矢先、自分が強盗に捕まえられて人質のトップになった。

（こんなんでトップになってもうれしくはないんだけど・・・）

と、そのときひとつの声が聞こえた。

「無駄な抵抗はやめて捕まりなさい。私は、レベル５の第六位よ」

（第六位ってまさか・・・）

「皐月！？」

すると、あちらも気付いたようでこちらを向いて話しかけてきた。

「あら、当麻じゃないの。やっぱり死んではいなかったみたいね」

「当たり前だ勝手に殺すな」

二人はそのまま会話を続けようかと思ったが、強盗がキレそうだったので、とりあえず捕まえることにした。

「それっ☆」

「きもちわる！！」

皐月のかけ声とともに、強盗の持っていた銃が、皐月の手元に移動した。

パーフェクトテレポーター。それは、どこにあるどんなものであろうと、元あった場所から指定した場所へと移動させることができる能力である。そのため、当麻とアクセラレータ以外は、見えない場所から何の前触れもなくいきなり体を突き刺す攻撃に対処できないので手も足もでない。しかも、アクセラレータでも、逃げられれ

ば捕まえるのは不可能なため、攻撃は効かないが倒すのも無理といった具合である。

　とりあえず武器を奪ったので、後は適当に、アンチスキルの目の前に頭から落としておいた。後はアンチスキルが処理するだろう。となれば面倒なことを聞かれる前に立ち去るべきだろう。なので、二人は騒ぎに紛れてこっそりとそのばから離れた。

「そいういやさ、俺が死んだって思ってたとか言ってたっけ」

「私はそう思って無かったけど、ほかのみんなは死んだかもしれないって考えてたみたいよ」

当麻は、ふと思い出してたずねた。

「ふ～ん。それなら、優先順位は一番目が沙由理で二番目がアクセラレータってとこかな」

「そうね。沙由理が一番苦しんでるだろうしね」

当麻は、「そうか」と頷いてから少し考えこんだ。

「まあ、久しぶりにあったんだし、ちょっと飯でも食っていくか」

「いいわね。もしかして、沙由理もそこにいるかもね」

「・・・ありえるかもな。あいつなら、俺とよく行ったファミレスに通ってたりしそうだ」

「確かに、あの子は末期だからね～」

適当に話しながらファミレスへと入っていく。そして、適当に食事をすませて店を出た。

「居なかったわね」

「まあ、そりゃな」

居るかもとは言ったものの、流石にそんな運命的な出会いはそうそうあるものでは……

「上条先輩？」

あるものでは……あったようだ。

声をかけてきたのは、噂の少女・神童沙由理だ。どうやら、ＡＩＭ拡散力場が壊されたことで当麻が近くにいることを察知し、それから走り回って探したようで、息を切らしている。

そんな一途な少女を見て、当麻は・・・少しいたずらをしたくなった。

「誰のことかは分からないけど、多分人違いだと思うよ」

「そんな・・・」

沙由理は、絶望しきった顔で座り込んだ。皐月は吹き出しそうなのを必死で我慢している。

「全く、お前は本当に変わらないな、沙由理」

沙由理は、戸惑うように顔を上げた。

「上条・・・先輩？」

当麻は頷く。
「ああ。俺だよ」
沙由理は、しばらくの間泣きながら当麻に抱きついていた。

沙由理の怒り

「でっ、上条先輩。言うことは？」

沙由理は笑顔だが、額には青筋が浮かんでいる。

「・・・悪かった」

「ぷぷっ。当麻、傑作。そりゃ沙由理も怒るわよ　」

当麻が謝罪するのを見て、皐月が笑っている。

「皐月先輩も！笑ってないで反省してください！！」

「なんで？」

怒鳴る沙由理に対し、皐月は心底不思議そうに首をかしげた。

「上条先輩を止めずに笑っていたんだから同罪です！！」

まだまだ怒りの収まらない様子の沙由理に対し、当麻は反論する。

「でも、お前だって俺が死んだと思ってたんだからおあいこだろ」

「別に死んだなんて思っていませんでしたよ」

「じゃあ、なんで泣きそうな顔してたんだよ」

当麻の問いに対し、沙由理は泣きそうになりながら答えた。

「だって、ぐすっ、ずっと、逢いたくて、ぐすっ、一生懸命、探して、ぐすっ、やっと、見つかったって、そう、ぐすっ、思ったら、人違いだって、ぐすっ、言われたから」

当麻は、目の前で泣き出しそうな少女を抱きしめた。

「ごめん。本当に悪かったよ。もう俺はどこにもいかないから、だから安心しろ」

「・・・ほんとう、ですか？」

「ああ。本当だ」

その言葉に、少女は安心して泣き止んだ。

「それじゃあ、罰として今度一日デートしてくださいね♪」

「まあ別にいいけど・・・」

沙由理は、よしっ！！とガッツポーズをして喜んだ。

その後、とりあえず三人で連絡先を交換した。

「マジック」再結成

ある日、皐月から「暗部組織としての権限が復活した」とのメールが届いた。とりあえず、リーダーが当麻の暗部組織「マジック」がメンバー三人の状態で再結成となったようだ。そして、その初仕事はイギリス清教のステイル案内の元、吸血殺し（ディープブラッド）の少女を保護することだった。

翌日、ステイルに場所を案内してもらい、建物の前から敵の居そうなところまでは皐月のテレポートで移動した（ちなみに当麻は能力を解放して、皐月のテレポートをイマジンブレーカーの対象外に設定した）

いきなり目の前に人が現れたことに驚くアウレオルスを無視して、当麻たちは話を進めていく。

「沙由理、こいつの目的は？」

「インデックスという少女の救済みたいですね」

沙由理は能力を使ってアウレオルスの思考を読みとる。

「やれやれ、いったいいつの話をしてるんだか？」

当麻のその言葉に、事情を知らない沙由理と皐月は頭上にはてなマークを浮かべた。

「まったくだね。インデックスはもうすでに救われているというのに」

唯一事情を知っているステイルは当麻の言葉への肯定を示した

「馬鹿な・・・」

「ああ、信じられない気持ちは分かるよ。何せ僕は直接それを見たのに未だに信じられない。いや、信じたくない、かな。永遠にあの子はこっちを振り向かない。その事実を突きつけられたようなものなんだからね」

「馬鹿な、ありえん！一体いかなる方法にて禁書目録を救う方法がある！？人の身で、それも魔術師でもなければ錬金術しでもない人間に何が出来ると言うのだ！」

「それについては必要悪の教会（ネセサリウス）………いやイギリス清教そのものの沽券に関わる黙秘するけど、そうだね」

ステイルは、残酷に煙をはいて、

「そいつの右手はイマジンブレーカーと言う。簡単に言えば人の手に余る能力の持ち主だって言うのさ」

愕然と、錬金術士は当麻を見る。

「・・・・待て、それでは」

「ああ、ご苦労様。君、ローマ正教を裏切って三年間も地下に潜ってたらしいけど、全くの無駄骨だよ。いや、努力が報われなかった痛みは分かるが気にするな。今のあの子は君が望んだ通り、パート

ナーと一緒にいてとても幸せそうだよ？」

「ーーーーは、」

その一言は決定的だった。

アウレオルス＝イザードは、自分を支える全てを破壊されたかのように狂笑する。

「ははは！！」

しかし、このままでは話が進まないので、沙由理がアウレオルスの脳を軽く洗脳して正気に戻した。

決着

「ーーーーー倒れ伏せ、侵入者共！」

当麻は、全身を覆うようにイマジンブレーカーを展開させていたので倒れなかった。しかし、他の三人が倒れていたので、イマジンブレーカーの効果範囲を一瞬だけ広げてアウレオルスの黄金錬成（アルス＝マグナ）を打ち消した。

「『グレゴリオの聖歌隊』によって、黄金錬成（アルス＝マグナ）を完成させたようだが、俺に異能の力はきかないぞ」

当麻は、自分の中の知識から黄金錬成（アルス＝マグナ）を完成させる方法を見つけ、言い当てた。

「馬鹿な、黄金錬成（アルス＝マグナ）が効かないだと・・・」

アウレオルスは戸惑いを見せたが、すぐに正気に戻り、暗器銃を取り出し、当麻に向けて放ってきた。しかし、暗器銃から放たれた刀身は皐月の手元に、勢いを失った状態でテレポートされた。

「なに！？」

驚愕するアウレオルスを沙由理が洗脳状態にした。

「上条先輩。これ、私が操ったら結構使えそうじゃありません？」

「まあ、本人が了承したらやってもいいけど・・・」

その後、姫神を救出してこの事件は解決となり、アウレオルスは「マジック」の一員となったが、当麻曰く「使う気はない。あくまで処分を逃れさせるための処置」だそうだ。

絶対能力進化計画（前書き）

これは、アクセラレータが初めて実験を行った日からの話です

絶対能力進化計画

アクセラレータは武装したクローンに、ほとんど怪我をさせることなく勝利し、実験用の部屋から出ようとしたが、なかなかドアが開こうとしない。

「実験は終わったぜェ。早くあけろよ。それともあれかァ？これを壊すのも実験の内なのかよォ」

アクセラレータは、モニターに映っている研究者にそう訪ねながら分厚いドアを蹴飛ばしてみた。すると、ドアは思いっきりへこんだ。これならすぐに蹴破れそうだ。

『いや、それは貴重な研究用の機材なのであまり壊さないでほしいのだが・・・。とにかくまだ実験は終わっていない。そのクローンを処分して実験は終了だ』

「あァ？処分だァ？」

アクセラレータの表情が険しくなる。

『ああそうだ。武装したシスターズを二万体殺害して実験は完成する。なに、気に病むことはない。そこにいるのは実験用の人形なんだから』

「・・・おい。そんなことが許されると思ってンのか？」

『何をためらってるのかは知らないが、君がこの実験を放棄してもシスターズは路頭に迷うだけさ。生きる意味も知らない、実験のた

めの知識だけを入力され、実験のためだけに生まれてきたんだからね』
「ふざけんな！！そんなことが許される訳がねェだろうが！！」
　アクセラレータは叫んだ。たとえどんな理由があろうと命が軽く見られていいわけがない。悪人の命を奪ったことはあるがこのクローン達はなにも悪いことをしていない。そんな人間を殺すなんて言語道断だ。
『しかし、生きる意味も分からず、不要と見なされ、ただ生きていくだけというのはつらいことだと思うがね』
　アクセラレータは黙り込んだ。過去の出来事が頭に浮かんでくる。あのとき、自分が当麻に出会わなければ自分はあのまま周りから怖がられ、研究対象として以外は誰からも必要とされずにただ生きていくだけだっただろう。実際当麻に出会うまではほとんどそんな感じだったのだ。だから、容易に想像がつく。それがどんなに辛いことなのか・・・
　だから、アクセラレータは振り返って汚い言葉を浴びせる。このクローン達が、「死にたくない、生きていたい」と、そう感じて生きる意味を感じることが出来るように。
「お前は本当にかわいそうだなァ。殺されるためだけに生み出されるだなんてよォ」
　しかし、その言葉はシスターズには届かない。
「それよりも、早く実験を終わらせた方がよいのでは？とミサカは

問いかけます」

クローンは、自分がこれから殺されるというのに、恐れを感じない平坦な声で問いかけてきた。

「チッ！！」

アクセラレータは、出来るだけ痛みを感じさせないようにしながら一人目のクローンを殺した。

それから、アクセラレータは毎回相手に恐怖を与えるような会話をしてどうにかこの実験を終わらせようとしたが、誰もその期待に応えてはくれなかった。アクセラレータは人知れず何度も涙を流した。悪党を名乗ってでも人を助けたいと願ったはずなのに、自分は殺すことしかできないのか、と。

学園都市最強と呼ばれる少年は、人知れず、すぐにでも崩れ落ちてしまいそうな顔をして泣いた。何度も何度も涙を流した。そして、誰よりも光を求める少年は、誰よりも深く暗い闇へと落ちていった・・・

打ち合わせ（前書き）

実は、前回の話はかなり気に入っている話だったんですよ～

というか、3巻と5巻のところの話が一番書きたい話だったんですけどね。

打ち合わせ

ある日、当麻は散歩していた。しばらくのんびり歩いていると、大量のコーヒーを持ったアクセラレータを発見した。

「おーい。アクセラレータ」

「ン、当麻ァ！？」

アクセラレータは驚いて駆け寄ってきた。

「オイオイ、死んだんじゃなかったのかよ」

「あれくらいで俺が死ぬかよ」

疑問を投げかけるアクセラレータに、当麻は笑って答えた。

「ははっ。そりゃそうか」

アクセラレータも笑い飛ばした。そしてしばらくの間二人で笑っていた。しかし、アクセラレータは急に険しい顔になった。

「・・・なァ、当麻。少し話があるンだが・・・」

「ああ、いいぜ。立ち話もなんだし、そこの公園まで行くか」

アクセラレータは頷き、二人で公園まで歩いていった。そして、ベンチに座ってから、アクセラレータは口を開いた。

「オレは今、絶対能力進化実験ってのをやってるンだけどよォ・・・」

アクセラレータは、今までの経緯を説明した。

「・・・そうか、その計画自体は俺も知っていた。俺が精神を壊される前にはすでにその計画はあったんだけど、準備段階にも入ってなかったんだ。だから、潰すのはもう少ししてからの方が良いと思って放っておいたんだが、しばらく目を離した隙にやられちまったみたいだな」

「そォか。・・・オレはどうすればいいンだろうな」

アクセラレータは悲しそうに呟いた。

「とりあえずだが、この実験さえ止めちまえばシスターズは助かる。この実験は、元々はアレイスターがシスターズを世界中にばらまくために考えたプランの一つだからな」

「・・・なンだと。じゃあオレは意味のないことでずっと悩ンでたのかよ」

アクセラレータは、少し悔しがるような仕草をした。

「そうなるな。だが、今更どうしようもないだろ。それよりも実験を終わらせる方法だが、オレが実験に乱入してお前を倒すことで、研究者共に『アクセラレータは無能力者（レベル０）に負けるほど弱かったんだ。やっぱり機械の出す答えにも間違いがあるんだ』って思わせる事が出来る。そうすれば実験は終了する」

「そンなのはツリーダイアグラムで演算し直されて終わりだろ」

「いや、ツリーダイアグラムは数日前に破壊されているんだ。実は・・・」

当麻は周りを確認してから小声で続けた。

「皐月が間違えて酒飲んじゃってさ、酔っぱらって机をツリーダイアグラムの内部にテレポートさせせちゃったみたいで・・・」

「って、オイ！！そンなショーもない理由で壊されたのかよ！？」

アクセラレータの心からの叫びに、当麻は苦笑いしながら話を続けた。

「まあ、とりあえず実験を止めることは可能だ。だから、次の実験の場所を教えてくれ」

「分かった」

こうして、アクセラレータと当麻の打ち合わせは終わった。しかし、二人は気付いていていなかった。一人の少女がこの会話を聞いていたことに・・・

打ち合わせ（後書き）

文章がめちゃくちゃですいません。

アクセラレータ「何だ何だよ何ですかァそのザマは！結局無駄に設定が派手なだけでたいしたことねェなァ！おら、思いっきりダメ出ししてやるからカッコ良く敗者復活でもしてみろっつの！」

皐月「いくらなんでも言い過ぎでしょ」

沙由理「そうですよ。作者さんないてますよ」

当麻「ほっといてやれ」

・・・かなり心にささったのでこれで終わります。

美琴　side

美琴は、当麻達が話しをしていた公園にたまたま居合わせていた。

（あれはアクセラレータ！？何でアイツと一緒にいるのよ！？）

美琴が、必死に隠れながらも疑問に思っていると、アクセラレータが話し始めた。

「オレは今、絶対能力進化実験ってのをやってるンだけどよォ・・・」

（何でいきなりアイツにそんな話をするのよ！？何が目的なわけ！？）

美琴はどんどん混乱していくが、そんなことはお構いなしに話は進んでいく。

そこで聞いた話は悲惨なものだった。殺したくないのに、相手が苦しまないようにするには殺さなくてはならない。それが嫌だから脅えさせて、「もう戦うのは嫌だ」とそう言わせたくて告げた言葉にもまともな反応を返してくれない。だから、まだ実験を終わらせることができない、と。

（何よ。それじゃあアクセラレータも結局善人だったてこと！？それに、もし仮に私がアクセラレータを倒せたとしても、あの子達を救う事は出来ないって事？）

美琴は今までいくつかの大きな事件を解決してきた。しかし、そ

れは仲間と協力して成し遂げたものだし、何より敵を倒すだけでいい単純なものだった。それは、当麻達のいるような本当の「闇」にはほど遠い。時には、助けたい相手を殺すことが一番の手段という場合もあるのだ。だが、そんなものを理解出来るほど美琴は強くはない。だから、美琴はどうして良いのか分からなくなった。

(こんなの、どうすればいいのよ・・・。そうだ!！アイツは！アイツはどう行動するの！？)

美琴がそう思っていると、当麻の口から予想外のセリフが飛び出した。

「・・・そうか、その計画自体は俺も知っていた。俺が精神を壊される前にはすでにその計画はあったんだけど、準備段階にも入ってなかったんだ。だから、潰すのはもう少ししてからの方が良いと思って放っておいたんだが、しばらく目を離した隙にやられちまったみたいだな」

(知っていた?どうして?それに潰すってアイツは一体何者なのよ！？)

「そォか。・・・オレはどうすればいいンだろうな」

(あのアクセラレータが弱音を吐くなんて、何か解決方法はないの？)

「とりあえずだが、この実験さえ止めちまえばシスターズは助かる。この実験は、元々はアレイスターがシスターズを世界中にばらまくために考えたプランの一つだからな」

（良かった、助ける方法はあるんだ。でも、実験を止めるって一体どうやって・・・）

「・・・なンだと。じゃあオレは意味のないことでずっと悩ンでたのかよ」

「そうなるな。だが、今更どうしようもないだろ。それよりも実験を終わらせる方法だが、オレが実験に乱入してお前を倒すことで、研究者共に『アクセラレータは無能力者（レベル０）に負けるほど弱かったんだ。やっぱり機械の出す答えにも間違いがあるんだ』って思わせる事が出来る。そうすれば実験は終了する」

それは、美琴には無謀な挑戦に思えた。いくら打ち合わせをして戦っても、あからさまに手を抜くと「アクセラレータが弱い」何て思わせることは出来ない。ある程度本気で戦うのなら、アクセラレータに攻撃が届く訳がない。

「そンなのはツリーダイヤグラムで演算し直されて終わりだろ」

「いや、ツリーダイヤグラムは数日前に破壊されているんだ。実は・・・」

そう言って当麻は周りを気にし始めた。

（まずいっ、みつかる！？）

しかし、なんとかみつかることはなく、当麻は小声で何かを話し始めた。

「って、オイ！！ そンなショーもない理由で壊されたのかよ！？」

アクセラレータがいきなりさけんだ。

(何？めちゃくちゃ気になるんだけど。ツリーダイアグラムはどんな理由で破壊されたのよ。研究所にも「何者かの手によって破壊された」としか記されてなかったし・・・)

「まあ、とりあえず実験を止めることは可能だ。だから、次の実験の場所を教えてくれ」

「分かった」

そうしてアクセラレータはその場から立ち去った。

(あいつはどうやってアクセラレータに勝つつもりなのよ!？)

今までの会話が気になった美琴は当麻に話しかけた。

「さっきの話、どういう事？」

アクセラレータの過去

当麻は焦った。まさか今の話を聞かれていたなんて。

(しまった。しばらく暗部に関わってなかったせいで感覚が鈍くなってたんだな。いつもならすぐに気付けたのに)

「ちょっと、聞いてるの!?さっきの話はどういう事!?」

「・・・そのまんまだよ。シスターズ計画は俺が潰す」

当麻はさっきのアクセラレータの話で、美琴がシスターズ計画について知っているということは聞いたので、隠しても無駄だと思いそう答えた。

「アクセラレータを倒すなんて無茶よ!!」

「・・・俺のアクセラレータに対する戦績は二百勝0敗だ」

「はぁ!?」

美琴は絶句した。学園都市の頂点であるレベル5、しかもその中でもさらに飛び抜けた頂点と言われているアクセラレータに対して二百勝○敗?というかそもそもどうして二百回も戦ったのだろうか。

「といってもまあ、7歳の時にあいつに出会ってからの戦闘全てだから、あいつが学園都市の頂点に立ってからだと半分ぐらいかな」

「それでも、あのアクセラレータにたいして負けなしって・・・」

「まあ、その辺は深く関わらない方が良い。・・・一度関わるともう二度と抜け出せなくなるからな」

美琴は最後のセリフがかなり深刻に聞こえ、気になったが当麻のほうを向くと微笑んでいたので、気のせいだと思って別のことを聞いた。

「にしても、アンタがあのアクセラレータと昔からの知り合いだなんてね。どういう関係な訳？」

「親友だよ。俺はアイツが道を踏み外そうとする度にアイツを諭してきたんだ」

美琴の問いに対して、当麻は懐かしそうに答えた。どうやら昔を思い出しているようだ。

「あのアクセラレータにも友達とかいたんだ。なんか意外ね」

「確かにアイツは普通の友達がほとんどいないよ」

「まあ、あんな態度じゃね。ていうか、何でアイツはいつもあんな態度をとってる訳？」

「アイツの目指すものが『一流の悪党』だからだよ」

「なにそれ？」

美琴が、理解できないと言うようにたずねた。

「そうだな、これを説明するとなるとアイツの過去から話すしかないな」

「アクセラレータの過去？」

当麻は頷いてから続けた。

「アクセラレータは小さい頃、ヒーローが好きな子供だった。弱い人間を守る、そんなヒーローにあこがれていた」

「へえ、なんか想像できないわね」

当麻は、そうだな、と頷いた。

「アイツに強い能力が現れたころ、アイツは一人の少女をスキルアウトから助けた。だけど、その戦闘はあまりにも一方的すぎた。アクセラレータが、少女に手を差し伸べた時、その少女は脅えるようにその手から遠ざかった。そして、こういったのさ。『近寄らないで、化け物』ってな」

「どうして、そんなこと・・・」

美琴は悲しそうに呟き、当麻は苦しそうな表情をした。

「怖かったんだろうな。助けてくれたとしても、圧倒的なちからを持つアイツが・・・。だからアクセラレータは『一流の悪党』を目指したんだ。悪党は何をしてもおかしくない。人を助けたら気まぐれだし、悪人相手に手を抜く必要ない。そして、助けた相手とも関わる必要がない。だから助けた相手を怖がらせることもない。

『一流の悪党』はただの弱い一般人に興味はないから手を出さないし、関係ない奴は極力まきこまない。それが『一流の悪党の美学』ってやつだからな」

「そんなの、おかしいわよ。やってることは善人となんら変わりはないのに・・・」

その場に暗い雰囲気が漂った。そして、しばらくしてから当麻は立ち上がり、その場を立ち去った。そして、当麻は帰り道でシスターズの一人を見かけたので声をかけた。美琴の双子だと思っているふりをして接しておいた。

右手で能力を打ち消して猫に触れるようにしてやるとすごく喜んでいた。それを見て、当麻は改めて思った。こんな実験は絶対に許せないと。

アクセラレータの過去（後書き）

夕方の実験は無い（つまり原作では夕方の実験で死んでいたシスターズは先に死んでいる）という設定でお願いします。

戦闘とその後（前書き）

戦闘は美琴視点です。

戦闘とその後

夜、美琴は気になって実験を見に来ていた。

当麻とアクセラレータが戦っている。とても真剣な表情で、アクセラレータは悪人を演じながら、当麻はアクセラレータに対して怒っている演技をしながら。それは、気をつけてみてみれば何とか分かる。だが、分からないのはこの二人の戦いだ。

アクセラレータは反射を切っているわけではない。当麻が右手で攻撃したとき以外は全て反射している。そう、当麻が右手で攻撃したとき以外は、だ。飛び道具を使っても跳ね返されるし、右手以外で触れれば反射が適応される。しかし、当麻は圧倒的なスピードで駆け回り、起用にフェイントを入れながら攻撃している。アクセラレータも相当体術が強いのだが、それでも圧倒的なさがある。そもそも、アクセラレータに体術を教えたのは当麻なので、その当麻を相手に勝てるわけがない。

(あの右手・・・いつも私の電撃を防いだりもしているけど、いったいどんな力があるって言うの？アクセラレータの反射を突き抜けること何て不可能なはずなのに)

美琴が考え事をしている間にも戦いは続く。アクセラレータが地面を蹴ってアスファルトを破裂させれば逆にそれを目くらましにして攻撃を加える。アクセラレータが空中へ逃げようとすれば圧倒的なスピードで間合いを詰め、たたき落とす。風を操作しても鉄骨を飛ばしても当麻には届かない。全てかわされ、苦し紛れに起こした粉塵爆発は、ただ相手の場所が分からなくなるだけだった上に息ま

で苦しくなった。

　こうして、当麻は無傷でアクセラレータに勝利した。地面に倒れて気を失ったアクセラレータはとても満足そうなすがすがしい表情をしていた。

　そして、その夜アクセラレータの病室に御坂妹がやってきて報告をしていった。調整が終わればまたここに戻ってくることができるそうだ。次の朝、当麻は美琴にそのことを伝えた。

「そっか」

　美琴は、それだけ言った。何か大切な物を見守るように目を細めて、けれどどこか翳りのある瞳を浮かべて。

　美琴が不用意に提供したDNAマップのせいで、二万人ものシスターズを、殺されるためだけに生み出してしまった。その事実は、これから一生美琴の背中にのしかかることだろう。誰もそのことを責めなくても、世界中の誰もがそのことを許しても、きっと彼女自身が一生背負って歩いていくだろう。

「けどさ、お前がDNAマップを提供しなければ、そもそもシスターズは生まれてくる事も出来なかったんだ。あの『実験』は確かに色々間違っていたけどさ、シスターズが生まれてきたことだけは、きっとお前は誇るべきなんだと思う」

　美琴は、しばらく黙っていた。

　やがて、ポツリと泣き出しそうな子供みたいな声で、言った。

「・・・、私のせいで、一万人以上のシスターズが殺されちゃったのに？」

それでもだよ、と当麻は答えた。

苦しい事に苦しいと言って。辛いことに辛いと思って。そんな、誰にでも出来る当たり前のことだって、生まれてこなければ絶対に出来ないことなんだから。

「だから、シスターズはきっとお前のことを恨んでいない。あの『実験』では色々歪んだ所があったけど、それでも自分が生まれてきた事だけは、きっとお前に感謝してたと思う」

当麻の言葉に、美琴は息をのんだ。そんな彼女の顔を見て、当麻は小さく笑いかけた。

「だから、お前は笑って良いんだよ。シスターズは絶対に、お前がたった一人で塞ぎ込む事なんか期待してないから。お前が守りたかったシスターズってのは、自分の痛みを他人に押しつけて満足するような、そんなちっぽけな連中じゃねーんだろ？」

美琴は、当麻のその言葉を聞いて、優しい微笑みを見て、胸が高鳴るのを感じた。

（そっか、私はこいつのことが好きなんだ・・・）

美琴は自身の好意を自覚し、日常へと戻っていった。

喫茶店にて（前書き）

今回は短い上に中途半端です（汗）

喫茶店にて

とある喫茶店に、「マジック」のメンバー４人が集まっていた。

「こうしてここに集まるのはずいぶん久しぶりだな」

「そうですね、上条先輩。ところで、膝枕してもらってもいいですか？」

沙由理はうずうずしながら当麻を見た。

「別にいいぞ～」

そう言って自分の膝をポンポンとたたく当麻。

「わ～い」

そういって早速当麻の膝に頭を置く沙由理。

「「・・・・・」」

それをあきれ顔で見ているアクセラレータと皐月。これだけを見ると、ごく平凡な学生達の日常に見えるのだが、ここに集まっているメンバーは普通じゃない。

全てのベクトルを操り、核爆弾でも傷一つつけることの出来ない最強の能力者、アクセラレータ。どんなに離れたところにあるものでも、どんなに重いものでも、どんなに遠いところへでも空間移動

させることの出来るテレポーターのトップ、炎道皐月。全ての人間の心の声を聞き、相手を洗脳して操る能力者、神童沙由理。そして、学園都市で最も強い男であり、暗部では「ウルフ」という風に「ドラゴン」同様に暗号化して呼ばれ、恐れられている男、上条当麻。

このメンバーなら世界征服だって朝飯前だ。しかし、だからといってもこうして集まったところで物騒なことを起こす訳ではない。この四人は暗部組織の仲間であり、日常での友達でもあるのだ。・・・まあ、沙由理が当麻に向ける感情は別だが。

「う～ん。ちょっと暇だな。何かするか？」

「その子はこのままゆっくりしてたいんじゃない？」

当麻が自分の膝を見ると沙由理が上目使いで見つめてきた。言いたいことは大体分かる。『もう少しこのままで』だ。しかし、当麻はその視線をあえてスルーする。

「ボランティアで清掃活動でもするか」

「オイオイ、このメンバーでゴミ掃除かァ？」

アクセラレータが茶化すように言った。

「ああ。路地裏で、な」

それにたいして当麻はニヤリと笑っていった。こうして当麻曰く『清掃活動』が始まった。

いざ、ゲームセンターへ

「よし、これで終わりか」

とある路地裏で、スキルアウトの集団が倒れていた。どのスキルアウトとも大きな外傷は無く、器用に倒されている。当麻が満足そうに辺りを見回すと、スキルアウト達に襲われていた少女が話しかけてきた。

「あ、あの、ありがとうございます！」

「ん？ああ。別に、ただの暇つぶしだし・・・」

素っ気なく答える当麻。

「上条先輩！早く次行きましょう！！」

それにもかかわらず、沙由理は当麻を一刻も早くその少女から遠ざけようとする。

(全く、可愛いやつめ)

当麻は心の中で呟き、三人を引き連れてその場をあとにした。

「上条せんぱ～い？今日はもうこれくらいにしてどこかへ遊びに行きませんか～？」

沙由理は甘えた声で当麻に話しかけた。

「そうだな、遊びに行くか。四人で」

当麻はそう言ってアクセラレータと皐月を見た。

「あァ。そうだなァ」

アクセラレータは沙由理を見ながらニヤリと笑った。

「そうね」

皐月もニヤリと笑った。

「うー。みんな意地悪です～」

・・・というわけで、少し不機嫌そうな沙由理を無視して、四人で遊びに行くことが決定した。

四人が、昔よく使っていたゲームセンターにつくと、当麻が三人にそれぞれ注意をした。

「アクセラレータはUFOキャッチャーだけはするなよ。チートすぎるから。あと、皐月はゲームの景品を空間移動で取り出すなよ。またえめんどくさいことになるから。そして沙由理、別にプリクラを一緒に撮るのはかまわないけど、最後にしろよ。でないとお前はずっとやめようとしないからな」

優れた演算能力を持ち、ベクトルの計算を得意とするアクセラレータがUFOキャッチャーをすると、店員泣かせの結果となってしまう。皐月については犯罪行為だし、沙由理の件は前科がある。よって、当麻の指示はこの上なく的確な指示だといえる。

「あァ、分かってる」

「うふふ、大丈夫よ（ニヤニヤ）」

「・・・ちゃんと最後に撮ってくださいよ？」

それぞれ違った回答が帰ってきた。

「ああ。分かってるよ、沙由理。あと、皐月の『大丈夫』はどの意味で大丈夫だと言っているのかが不安なんだが・・・」

当麻の言葉に、沙由理は喜び、皐月は無言でゲームをしに行った。

当麻はやれやれと呟き、アクセラレータと一緒にガンシューティングをした。そして、完全なノーミスで最高スコアを叩き出し、二人でハイタッチをした。

そのとき、後ろから誰かが話しかけてきた。

「へ～え、アクセラレータもそんな純粋に笑ったりするんだ～」

「ビリビリ！？」

「あァ？超電磁砲（レールガン）かァ？」

そう、そこにいたのは常盤台のエース、御坂美琴だ。

ところで、皆さんはお忘れで無いでしょうか？常盤台のレベル５と言えばもう一人・・・

「上条せんぱ～い？ジュースをどうぞ」

「ああ。サンキュー」

沙由理は当麻にジュースを渡してから美琴に気づいた。

「あれ、御坂先輩？なにしてるんですか？」

「あなたは神童さんよね？私と同じ常盤台のレベル５の。こいつとはどういう関係？」

「どういうって・・・。う～ん。とりあえず現在片思い中です」

「はあ！？」

ゲームセンターにて

　美琴は言葉を失った。

（そもそも、この子はこんなキャラだったっけ？それにアイツの前で堂々と『片思い中』って言ったてことは、アイツはあの子の気持ちを知っているということよね？それで『片思い中』っていうことは、アイツはこの子のことを振ったたってこと？）

　美琴が頭を抱え込んで当麻のほうを見ると、当麻が沙由理の頭を撫でていた。

（あっ、いいなぁ・・・。って、ちがう！！そうじゃなくて、そのうえでこの雰囲気ってことは、私はかなりリードされてるんじゃあ・・・）

「御坂もやるか？シューティングゲーム」

「・・・私はいい」

「そうか、それじゃあレースゲームでもやるか」

「おォ。いいねェ。勝負だぜ」

「ほお、この俺に勝てるとでも？」

美琴が誘いを断ったので、当麻はアクセラレータと言い合いながが

らレースゲームのほうへと歩いていった。

～美琴＆沙由理　ｓｉｄｅ～

その場に、美琴と沙由理が取り残される。

「・・・御坂先輩、上条先輩は渡しませんよ」

「なっ、どうして！？」

「私は『心理掌握』ですよ？」

あわてる美琴に対し、沙由理はさらりと答えた。

「・・・アンタは絶対に敵に回したくないわ」

「それなら上条先輩のことを諦めて欲しいんですけどね」

「嫌よ。絶対に負けないんだから！！」

「素直になれてない御坂先輩が私に勝てますかね？」

二人は笑いながら歩いていく。格闘ゲームコーナーへと。

～当麻＆アクセラレータ　ｓｉｄｅ～

「なァ、当麻ァ。さっきのレールガンの様子、あれは・・・」

「分かってるよ。はあ、こっちは沙由理だけでもいっぱいいっぱいいっぱい

だってのに、余計な手間を・・・」
「自分のせいだろ？」
「知るかよアイツらが勝手に俺を好きになっただけじゃねえかよ。俺は何もしてないぞ」
そう言って、笑いながらレースゲームに百円玉を入れ、勝負を開始した。
しばらく勝負を繰り返した後、当麻は時間を確認してから立ち上がった。
「じゃあ俺はそろそろ行ってくるわ」
「あァ、分かった」
短いやりとりを済ませ、当麻は沙由理のほうに向かった。

ゲームセンターにて　２

〜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ〜

「おい、沙由理。そろそろやるか？」

「はい、行きましょう！！」

沙由理は力強く返事をして立ち上がった。

「どこへ行くの？」

さっきまで沙由理と対戦していた美琴が不思議そうにたずねた。

「上条先輩とプリクラを撮るんです」

沙由理はそう返すと当麻を連れて走っていった。

美琴は、しょうがないのでアクセラレータのほうへ向かった。

「ねえ、アクセラレータ。神童さんとアイツはいつもどんな感じ？」

「あいつらがどんな感じ、ねェ。まァ、いっつも沙由理が甘えて当麻があしらってる、てとこかァ。まァ、当麻も沙由理のことをかわいがってるけどなァ」

「そう・・・。にしても、アンタらはよく三人でここにきてるの？」

「あァ、そうだなァ。昔はよくきてたな。あと、昔は六人で今は四人だ」

「四人？もう一人は？」

美琴が疑問に思ってたずねてみると、後ろの方から答えが返ってきた。

「わたしよ」

「誰？」

「レベル五第六位、完全空間移動（パーフェクトテレポーター）の炎道皐月よ」

「またレベル五・・・」

美琴は少し考えるような仕草をした。

「まァ、別に物騒なことばっかりやってはいねェよ」

「そう、ならいいわ」

美琴は安心したように息をついた。

「あら、そろそろ時間ね。それじゃあ、そろそろ行こうかしら？」

「あァ、そうだなァ。それじゃあ、またなァ。レールガン」

アクセラレータはそう言って立ち去った。

その後、当麻達は全員集まってから帰っていった。

仕事とデート

ゲームセンターへ行った日の３日後、四人はまた喫茶店に集まっていた。

「今日は、『マジック』の仕事があるんだ」

全員がくつろぎ始めたころに当麻が本題をきりだした。

「何の仕事だァ？」

アクセラレータが不敵な笑みを浮かべてたずねる。

「なあに、ただのゴミ掃除だよ」

当麻がそう言った瞬間、全員の口がつり上がった。

〜とある路地裏〜

スキルアウトの集団がアクセラレータを取り囲み攻撃するが、全て反射される。その近くで皐月が、アニメの魔法使いが使っていそうなステッキを振りながらスキルアウト達を空間移動で倒している。このステッキは皐月がノリで使っているだけで、能力には何の関係もない。なので、ステッキを向けた方とは違うものを空間移動させる、といったフェイントを使ったりしている。・・・別にそんなことをする必要もないのでこれもただの遊びだ。

当麻は高速で走り回りながらスキルアウトを気絶させていき、沙由理は目撃者の記憶をいじって隠蔽工作を行っている。

こうして、『ゴミ掃除』は開始からわずか五分で終わりを迎えた。

「しっかし、こんな簡単な仕事を俺達にさせるなよ・・・」

「まあまあ、いいじゃないですか。それよりも、上条先輩。前に私が、『罰として一日デートしてもらう』って言ったの覚えてますか？」

「ああ、そうだったな。いつにする？」

「明日、もし暇なら遊園地にでも・・・」

「ああ、分かった。じゃあ九時に喫茶店の前に集合な」

「はい！！」

二人のやりとりが終わった後、当麻が解散を言い渡して、バラバラに帰っていった。

～翌日～

「すいません。上条先輩、待ちましたか？」

「いや、今きたところだけど、まだ八時だぞ？」

「そう言う上条先輩こそ、私より早く来てるじゃないですか」

「まあ、お前が早く来るのは予測済みだからな」

当麻はそう言って近くのデパートへ歩き始めた。

「ああっ。待ってくださいよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その後、二人は遊園地の開園時間まで時間を潰してから、遊園地へ行った。そして、すこし遊んでから一旦昼食を挟み、またいろんなアトラクションを回り、最後に観覧車に乗った。

「上条先輩、今日は久しぶりに二人っきりで遊べてすごく楽しかったです」

「ああ、俺もだよ」

当麻は優しく微笑む。

「上条先輩はもしかしたら、一生私のことを好きになってくれないかもしれませんけど、私は絶対に諦めませんから、だから覚悟してくださいね？」

沙由理が意志のこもった顔で宣言する。

「俺は、お前を一生好きにならないとは思っていない。多分いつかは俺のお前に対する気持ちが恋になる時がくると思ってる。だから、別に遠慮とかする必要はないし、

もっと自分に自身を持っていい」

当麻は優しく答え、沙由理の頬にそっと口づけした。

「そう言ってもらえると嬉しいですよ。上条先輩も私に遠慮なんかしなくていいですからね？別に私を体裁良く利用しても、私は喜んで働きますから、私は上条先輩のためならなんだってしますから」

沙由理は笑顔で言った。

観覧車から降りた二人は、とても楽しそうな笑顔で分かれていった。

仕事をしたり、あそんだり、ときには戦闘訓練をしたりもする。そして、いつも仲良く、深い絆で結ばれている。それが『マジック』という組織である。人並みをはずれ、輪の中心に立つ事はできても輪の中に混ざる事はできない、そんな人間ばかりを集めて輪を作る。そうしてなりったているものこそが『マジック』の日常なのである。

仕事とデート（後書き）

う～ん。デートはもっと細かく書くつもりだったんですが、自分がやったことない分どうも想像しずらくて・・・

最後は結構うまくまとめられてると思いますがどうでしょうか？

ちなみに、「輪の中心に立つ事はできても輪の中に混ざる事はできない」っていう言葉は三巻の白井のセリフからとっています。

とある科学のアクセラレータ（前書き）

だんだん題名が思い浮かばなくなってきました（汗）

とある科学のアクセラレータ

深夜の路地裏には、怒号と絶叫と悲鳴と何かが壊れる音が炸裂していた。

コンクリートとコンクリートに阻まれた、細長い直線のような場所だった。おそらく両サイドを阻んでいるのは学生寮だろう。そこで七人ぐらいの少年が息をまいている。さらに視界を下に向ければ、地面には三人ほどの人間が血を流して倒れていた。

七人の少年達の手にはジャックナイフや警棒、催涙スプレーなどが握られている。破壊力は抜群だが使い慣れている感はなく、ビニール包装を解いたばかりの新品ですという印象は拭えないが、それが殺人にも使える獲得物である事には間違いはない。いや、むしろ素人が威力も分からずに振り回すと言うのも、それはそれで別種の危険を孕んでいると言っても良い。

七人の少年達はたった一人の人間を取り囲んでいた。彼らの目は皆、血走っていた。それでも、取り囲まれているたった一人の人間は動じない。

むしろ、自分を取り囲んでいる凶器持ちの七人の事が視界に入っていないかのように、細く切り取られた夜空を見上げながら何かを考えているようにも見える。コンビニに行った帰りなのか、店名の入ったビニール袋をブラブラと揺らしている。中身はどうやら缶コーヒーらしく、十本以上の缶が袋を内側から押していた。

彼は白く、白く、白い印象を持つ少年で、それ以上に学園都市最

強の超能力者（レベル五）というイメージを見る者へ凶悪に叩きつける。

ふと思う。自分があの実験でやってきたことはいったい何だったのか。

アクセラレータと呼ばれる人間は、ぼんやりと思考する。

結局、あの実験で自分は、研究者の言葉を真に受けてシスターズを殺害し、当麻に相談してそれに気付き、当麻の協力によって実験を終了させただけだ。一人では何も出来なかった。と言うよりは、「何もしようとしなかった」と言ったほうが正しいだろう。本気でどうにかしたいと思ったのなら、出来ることはたくさんあった。

なのに、自分はいつも頼りにしていた親友がいないというだけで諦めて、何もしようとしなかった。当麻のことも調べようとしなかった。その結果、一万人以上ものシスターズを殺害してしまった。

この前、久しぶりの『マジック』の仕事で当麻の人助けに参加したりもしたが、とうてい償いきれるとは思えない。

アクセラレータはそこまで考えてから、自分を嘲笑った。償う？それは善人のすることだ『悪党』の自分には関係無い。

そう、自分は悪党だ。向かってくる悪人まで救うようなヒーローでもなければ、他人に親切にするような善人ですらない。自分はあまり他人に関わってはいけない。他人に関わったら怖がらせてしまう。だから、『一流の悪党』でいようと決めたんだ。今更、弱音な

んてはいてどうする？

「あン？」

ふと自分を取り囲む喧騒沈黙している事に気付き、アクセラレータはようやく路地に切り取られた夜空から周囲に目をやった。アクセラレータを勝手に取り囲んだ凶人達はこれまた勝手に自滅して汚い地面の上にのびていた。のびていた、と穏便な言葉で表現するには辺りに血が飛び散りすぎていたが、少なくとも死者はない。

それを確認したアクセラレータは、とどめをさそうとも思わずにそのまま歩いていった。雑魚には興味がない、だからわざわざ振り返って殺そうともしない。それが、アクセラレータの目指す『一流の悪党』のやり方だ。そもそも、こんな戦闘とも認識しないような事でいちいち相手を殺す理由はない。

アクセラレータは、自分に降りかかる『音』を反射設定に加えて再び考え事に没頭した。何となく夜空を見上げながら歩く。前は見ていないが、障害物を気に留める必要はない。『反射』があれば彼の体が傷つく事はない。

しかし、だからこそアクセラレータは気付くのが遅れた。

何者かがアクセラレータのすぐ後ろにぴったりと張り付きながら、喉をぜェぜェ鳴らして必死に何かを叫んでいる事に。

不審な少女

　アクセラレータは、ふと違和感を感じて後ろを振り向いた。すると、何者かがアクセラレータの後ろをついてきていた。

　奇妙な人間だった。まず、格好がおかしい。頭から汚い毛布を被っているだけである。どこぞの秘密結社のマントのように明るい空色の毛布で顔も体もすっぽりと隠していて、その人物の性別すらも判断できない。その下にどんな服を着ているのかも分からない。

　その上、身長が極端に低かった。決して大柄ではないアクセラレータの腹ぐらいの高さしかない。十歳前後の少年か少女だろう、おそらく。平均的なホームレスに比べて、明らかに幼すぎる。もっとも、この学園都市の住人の八割は学生なのだから、全く例がないという訳でもないが。

　その怪人チビ毛布はアクセラレータに向かって何かを叫んでいる。

「ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！・・・・・・、ーーーーーーーーーーーーーーー。・・・・・・ッ！？」

　が、音を『反射』しているのでアクセラレータの耳まで届かない。アクセラレータはのんびりと頭上を見上げてから、試しに音の『反射』を切ってみた。

　アクセラレータの耳に、甲高い、しかしどこか平坦な少女の声が飛んでくる。

「ーーーーーーーー　いやーなんというかここまで完璧無反応だと

むしろ清々しいというかでも悪意を持って無視してるにしては歩いているペーストか普通っぽいしこれはもしかして究極の天然さんなのかなーってミサカは首を傾げてみたり」

こいつはいったい何だァ？アクセラレータはそう思い、ふとこの少女の放ったセリフを思い出した。

「待て。・・・・、ミサカだと？」

アクセラレータの足がピタリと止まる。何が嬉しいのか、それだけで毛布少女は小走りになって追い着いてきた。実は顔が見えないので正確なところは良く分からないのだが。

少女は嬉しそうにしゃべり始めたが、アクセラレータはそれを聞かずに言葉を放つ。

「ちょっと待てコラ今すぐ黙れ。オマエその頭から被ってる毛布取っ払って顔見せてみろ」

「って、え？ぇと、えっと、えーと、まさかこんな往来で女性に服を脱げというのは些か大胆すぎるというか要求として無茶があるというかーーーーーーーーー　ってあのー、ミサカはミサカはたずねてみるけど。ほんき？」

「・・・・・、」

「わあ黙った。本気と書いてマジと読む目だよこの人ってやめて毛布を引っ張らないで。この下はちょっと色々まずいんだからってミサカはミサカは言ってるのにぎゃああ！？」

最後だけは平坦な口調では無くなっていたが、それでどうにかなる訳でもない。彼女の頭の上に被さっていた毛布は下へ下へと落ちていく。

――――――　まず始めに見えたのが顔。アクセラレータのよく知るレディオノイズ『シスターズ』と全く同じモノ。ただし、『シスターズ』の年齢設定が十四歳であったのに対し、目の前の少女の顔つきは十歳前後でしかない。なにかびっくりしていたように大きく目を見開いていた。ここらへんも、やはりシスターズらしくない。

――――――　次に見えたのが肩。
素肌が露出するデザインの衣服を着ているのか、やはり体つきは十歳前後のものらしく、浮き出た鎖骨などは触れただけで折れそうな繊細さを垣間見せている。

――――――　さらに見えたのが裸の胸。

――――――　そして見えたのが裸の腹

――――――　最後に見えたのが裸の足。

「あァ？何だこりゃあ、――――――ってか何だァそりゃあ！？」
毛布をつかんだままのアクセラレータの顔が思わず引きつった。
この場に当麻達がいたら迷わず爆笑していただろう。
結論だけ言えば、その少女は毛布の下には何も身につけていなかった。事態に心がついていけないのか、彼女はリアクションを忘れて呆然と突っ立っていた。詰まる所、完全に素っ裸の少女が目の前に

いた。

ラストオーダー

毛布を毛布を返して返してと涙目で言う少女の頭にアクセラレータは汚れた布の塊を投げつけた。少女はそれを受け取るとモソモソと自分の全身を包み込み、説明をし始めた。

「ミサカの検体番号は二〇〇〇一号で、『シスターズ』の最終ロットとして製造されたんだけど、ってミサカはミサカは事情の説明を求めてみるけど。コードもまんま『ラストオーダー』で本来は『実験』に使用されるはずだったんだけど、ってミサカはミサカは愚痴ってみたり」

あァそうかい、とアクセラレータはこの少女をどうするか考えながら大通りを歩いていく。ラストオーダーはあわてて彼の背中を追いかけながら、

「ところがどっこい見ての通り『実験』が途中で終わっちゃったからミサカはまだ体の調整が終わってないのね、ってミサカはミサカはさらに説明を続けたり。製造途中で培養器から放り出されちゃって何だかチンマリしちゃってるの、ってミサカはミサカは・・・・聞いてる？」

それで俺にどォしろってンだ、とアクセラレータは歩きながら言う。

自分はヒーローではない、悪党だ。だから、せいぜい自分に出来ることは研究者に引き渡すことだけだ。しかも、出来る限り愛想悪く接しながら。

自分がこの少女達にしてきたことを考えると、この少女が自分に関わっているのはあまり良いこととは思えない。だから、なるべく早く研究者に引き渡すべきだろう。そう考えていると、研究者とコンタクトをとって培養器に入れてもらい、製造途中で不安定な状態の、肉体と人格を『完成』させて欲しいと言ってきたので、少女に対して冷たく当たりながら、明日にでも実験施設の方に行こうと考え、そのまま少女を連れて学生寮へ帰っていった。

アクセラレータは帰ってからすぐに予備の布団を引き、少女にそこで寝るように言ってからベットに入って寝た。

アクセラレータが目を覚ましたのは午後二時だった。それから、腹を空かせたラストオーダーを連れてファミレスへ向かった。実はかなり料理がうまい意外性抜群の家庭的なアクセラレータであるのだが、どう考えてもイメージが崩れるし、料理の材料も足りなかったのでファミレスで食事をとることにした。

店に入り、席に着いたアクセラレータがぼんやりと窓の外へ目を向けると、背を丸めて通りを歩いている白衣の男が見えた。

「あ？」

こちらの視線に気付くと、電気が走ったように脅えて駐車場に停めてあるスポーツカーの中へと飛び込んで行く。

「アイツ・・・・天井(あまい)亜雄(あお)？」

アクセラレータが呟くと、はえ？という顔でラストオーダーがメ

ニューから顔を上げる。

天井亜雄。二〇代後半の研究員で、絶対能力進化実験を最後まで推し進めていた人間だ。スーパーコンピューターの予測演算によって計画された『実験』は、その演算結果が狂っていると判断され、現在では半永久的に凍結されている。『実験』推進派は今も、膨大なデータの山に隠れたバグを探すために連日格闘しているはずだが・・・・。

「あのヤロウ・・・・・・コンなトコでナニやってやがンだ・・・・・・？」

「ナニ見てナニ考えてナニ言ってるの？ってミサカは聞いてみたり」

「うるっせェな。オマエの今一番の目的ってのをちっとは思い出してみろ」

「え、ご飯食べることだけど、ってミサカはミサカは即答してみたり。あ、これはもしや今日はナニ頼んでもイイんだよキミって展開かも、ってミサカはミサカは期待してみる」

「あァ、なンかどォでもイイか別に」

このやりとりをしている内に天井の乗ったスポーツカーは表通りへ消えてしまう。ラストオーダーはそのことに気付かず、目の下をごしごしと擦っていた。その体が左右にふらふらと揺れている。

「ううむ。ここ最近寝ても寝ても疲れがとれない、ってミサカはミサカは首をひねってみる」

「あっそォかよ」

水を運んできたウエイトレスに向かってアクセラレータは適当に注文した。

しばらくしてから料理が届き、二人は食事を始めた。

ラストオーダー（後書き）

アクセラレータの部屋は襲撃されていない設定です。多分いつか破壊されることでしょう（笑）

だって、黄泉川とかを出すのに必要だった気がするし・・・。

「美味しい美味しい、ってミサカは評価してみたり」
「っつか冷凍レトルトフリーズドライのオンパレードじゃねェか。食材なンざ何週間前から倉庫に放り込ンであるのかも分かンねェっつの」
「けど美味しいものは美味しいし、ってミサカはミサカは満足してみたり。それに誰かと食べるご飯っていうのは感覚が違うもの、ってミサカはミサカは精神論を述べてみる」
「・・・・、あのなァ。ホントなら昨日の時点で訊いておくべきだったと思うけどよォ、オマエどォいう神経してンだよ。俺がオマエ達にナニやったか覚えてねェのか？痛かったし苦しかったし辛かったし悔しかったンじゃあねェのかよ」
　アクセラレータは、ずっと疑問に思っていたことを訊いた。すると、ラストーオーダーは説明を始めた。
　シスターズは全員脳波リンクで精神的で精神的に接続した状態である。その脳波リンクが作る精神ネットワークというものがあり、それは『ミサカネットワーク』という巨大な一つの脳があってそれが全『シスターズ』を操っていると言う見方が正しい。
「『ミサカ』単体が死亡した所でミサカネットワークそのものが消滅することはない、ってミサカはミサカは説明してみる。人間にたとえるなら『ミサカ』は脳細胞で、脳波リンクは各脳細胞の情報を伝達するシナプスのようなもの。脳細胞が消滅すると経験値としての『思い出（データ）』が消えるのでもちろん痛い、けどミサカネットワークそのものが完全に消滅する事はありえない、『ミサカ』が、最後の一人まで消滅するまでは・・・・、ってミサカはミサカは考えていたんだけど、気が変わったみたい」
「？」
「ミサカはミサカの価値を教えてもらったって断言してみる。『ミ

サカ』全体ではなく、『ミサカ』単体の命にも価値があるんだって事を教えてもらったから、ってミサカはもう死なない、これ以上は一人だって死んでやる。だからミサカはもう死なない、ってミサカは胸を張って宣言することは出来ない、ってミサカはミサカは考えてる」

アクセラレータは、心の中で笑った。あんなに感情が見られなかった『シスターズ』もこんな風に考えられるようになったのか。わざわざ『シスターズ』には伝えずに実験を終わらせるための戦いをやったかいがあった。・・・しかもセリフ付きで。

しかしその後、少女はアクセラレータに、感謝していると言った。アクセラレータがいなければ『実験』は立案されず、傾きかけていた量産型能力者計画が再び拾い上げられることはなかったからと。

「何だよそりゃァ？全っ然、理論的じゃねェだろ。人を産んで人を殺して、ってそれじゃあプラスマイナスゼロじゃねェか。どォいう神経したらそれで納得できんだよ、どっちにしたって俺がオマエ達を楽しんで喜んで望み願って殺しまくった事に変わりねェだろォが」

「それは嘘、ってミサカはミサカは断じてみたり。アナタは本当は『実験』なんてしたくはなかったと思う、ってミサカはミサカは推測してみる。

その言葉に、アクセラレータはは焦った。確かに自分はあの『実験』を望んでいなかったが、それをばらすわけにはいかない。

「ちょっと待てよ。オマエ自分の記憶を都合が良いよォに改ざンしてンのか。一体どこをどう美化すりゃあそンなセリフが出てくンだよ？っつか俺がアレを嫌々やらされてる風に見えたのか。俺が『実験』を続けていた以上、俺はオマエ達の命なンて何とも思ってなかった。たったそれだけの事だろォが」

アクセラレータは諭すような口調でそう言った。

「そんな事はない、ってミサカはミサカは反論してみたり。だったら、何で『実験』の中でミサカに話しかけてきたの？ってミサカはミサカは尋ねてみる」

「・・・・・」

アクセラレータは黙り込んでしまった。

会話2

ラストオーダーは、黙り込んでしまったアクセラレーにかまわず話を進める。

「本来、『人に話しかけたい』というコミュニケーションの原理は『人を理解したい』『人に理解して欲しい』ーーーつまり『人と結びつきたい』という理由のためで、ただ殺すため『実験』を成功させるためっていうなら会話をしたいとは思わないはず、ってミサカはミサカは論じてみる」

「・・・・・あァ？あの汚ねェ言葉のどこが『人と結びつきたい』に繋がンだよ」

「そう、そこがおかしな所の二つ目、ってミサカはミサカは指を二本立ててみる。アナタの言葉はどれも徹底してミサカを罵倒する言葉ばかり、それだと『人と結びつきたい』という理由から遠く離れてしまうってミサカはミサカは先を続けてみる」

だけど、とラストオーダーは言う。

「もしも仮に、それらが否定して欲しくて言っていた言葉だとしたら？」

ラストオーダーは続ける。

「アナタの言葉はいつだって戦闘の前に告げられていた、ってミサカはミサカは思い出してみる。まるでミサカを脅えさせるように、ミサカにもう戦うのは嫌だって言わせたいように、ってミサカはミ

サカは述べてみる」

ラストオーダーは一旦そこで切ってから続けた。

「ミサカ達はアナタのサインに気づけなかった、たったの一度も気づいてあげられなかった、ってミサカはミサカは後悔してみる。でも、もし、仮に。あの日、あの時、ミサカが戦いたくないって言ったら？ってミサカはミサカは終わった選択肢について語ってみる」

アクセラレータは考える。もし仮にそうなっていたとすれば、どれだけ楽だっただろうか？少女が戦いたくないと言ってくれていれば、自分は学園都市全てを敵に回してでも少女達を守っただろう。しかし、だからといって現状でも自分に出来たことはたくさんあったはずだし、そもそも『学園都市全てを敵に回す』と言っても、自分にとっては強い覚悟が必要なものでもない。『マジック』のメンバーが敵に回ることはないだろうから、学園都市は彼に傷一つつけることすら出来ない。つまり、自分にとって、ヒーローみたいに決着をつけるということはいろんな面で不可能だった、ただそれだけのことだ。

アクセラレータがそこまで考えてから目を開けると、ラストオーダーが熱病にでもうなされているようにテーブルに突っ伏していた。

ラストオーダーは、調整が終わっていないのが原因だと言った。アクセラレータは、研究者を完全に信用するのは危険だし、この状態でこの少女を運ぶのもまずいんじゃないかと思ったので、少女を置いて一人で研究所へと向かった。

ウイルスコード

研究所に行くと、研究員の一人である芳川桔梗(よしかわききょう)に、何者かがラストオーダーの頭に不正なプログラムを上書きしたと聞かされた。

ラストオーダーは『シスターズ』の司令塔となる存在であるため、このまま放っておくと、不正プログラムの内容が予測通りなら、一万人もの『シスターズ』が人間に対して無差別な攻撃をすることになる。そして、その犯人は天井亜雄らしい。

アクセラレータは、ラストオーダーの人格データが収まったデータスティックと電子ブックの収まった封筒を受け取ってラストオーダーと別れたレストランへと向かった。

しかし、すでにラストオーダーは天井亜雄に連れて行かれた後だった。アクセラレータは天井亜雄の向かう場所を予測してそこに向かった。幸運だったのは、何者かが学園都市に進入して警戒態勢が強まったせいで、相手は身動きがとりずらくなったということだった。

アクセラレータが天井亜雄のいる場所に着くと天井亜雄はあわてて逃げようとしたが、アクセラレータは思い切り飛び上がり、天井亜雄の乗っているスポーツカーを追い越し、目の前へと着地した。そして、勢いよく突っ込んできたスポーツカーを、中に乗っている人間に傷がつかないようにして破壊した。

天井は逃げようとして運転席のドアを勢いよく開けたが、アクセラレータの攻撃によって気絶した。

アクセラレータは携帯電話を取り出して芳川に報告した。

「芳川か？　ああ、ガキなら保護したぜ」

しかしその直後、ラストオーダーのウイルスコードが起動し始めた。

芳川は、ラストオーダーを殺すことで一万人もの『シスターズ』の暴走をとめろと言ってきた。

（他に何か方法はねェのか？　諦めるにはまだ早ェ。当麻なら、絶対に最後まで諦めねェはずだ。俺にだって出来ることはある）

アクセラレータは、そこでふと思い出した。当麻はたまに脳の電気信号を操って、秘密を知ってしまった者の記憶を消していた。アクセラレータは脳の電気信号の中からそれぞれのデータを識別することが出来ないのだが、幸い自分が所持しているデータスティックにはラストオーダーの『感染前』の人格データだ。ここにあるデータ以外のデータを全て消してしまえばいい。自分と話したりした記憶も一緒に消すことになるだろうが問題はない。むしろ忘れてしまった方がこの少女のためだ。

そう思ったアクセラレータは、芳川にこの解決方法を伝えた。そして、できっこないと言って止めようとしてきた芳川を無視して携帯電話を投げ捨てた。

そして、アクセラレータはデータスティックを電子ブックへと差し込んだ。

画面に表示される膨大な量のテキストを、滝が流れるような速度

でスクロールさせながら読破していく。全てを読むのに四十二秒。目を閉じて反芻するのに三十八秒。目を開いて自分の記憶と画面を照らし合わせるのに五十三秒。

準備は整った。ぐしゃり、と彼は手の中の電子ブックを握りつぶした。

『反射』を切った彼の手が、助手席に沈む少女の額へ触れる。そこから生体電流を掴み、まるで触手で体内に侵蝕するようにその『ベクトル』へ接触する。その接触した『ベクトル』を元に、さらにその周囲の生体電流の『ベクトル』を予測演算していく。

タイムリミットまで後五十二秒。

アクセラレータは、現在のラストオーダーの『ウイルス感染後』の人格データと、データスティック内の『感染前』の人格データの双方を照らし合わせる。

二つのデータの『相違点』が感染コードとなる。そこにはウイルス感染後にアクセラレータと共にいた思い出も含まれるが、どれがウイルスでどれがメモリかはもはや判断がつかない。

上書き修正すべきコード数が浮かび上がる。その数合わせて三十五万七千八十一。とにかくウイルスを消すためには、全てのコードを削除するしかない。

ラストオーダーの頭の中に流れる異物『コード』を理解すると同時、アクセラレータはそれら全てに命令を送る。コマンドはただ一文『上書き』。

ザァ・・・・、と。波が引くように膨大な電気信号が移動するのを彼は感知する。

ウイルスコード（後書き）

色々端折ってすいません。ただでさえ「内容が薄い」と言われているのに・・・

でも、こうでもしないと長くなりそうだったので・・・

次回、事件解決です。原作とは違う結末に乞うご期待。

いける、とアクセラレータは確信した。これなら時間内ギリギリでウイルスコードを完全修復する事ができる。

その時。

がさり、という物音がアクセラレータの耳に入った。ウイルスコードを上書きしながら目を向けると、気絶していたはずの天井亜雄が、いつの間にかアクセラレータの側まで近づいていた。

それだけなら何の問題もない。だが、彼の手には黒光りする拳銃が握られていた。

「邪魔を・・・・す、るな」

血走った目で、天井亜雄が呻き声をあげる。

残りコード数は二万三千八百九十一。まだ手は離せない。断片的に残ったコードが誤作動を起こせば、ラストオーダーの頭が破壊される恐れも考えられる。

互いの距離は四メートル弱。外そうと思っても外せる距離ではない。

「く・・・・っ!?」

今のアクセラレータはラストオーダーな脳内の信号を操るために

全力を注いでいるので、『反射』に力は割けない。そんな事をすれば電子顕微鏡クラスの、精密な電気信号のやり取りに狂いが生じる。それはラストオーダーの脳を焼き切る事を意味していた。

残りコード数は七万一。作業はまだ終わらない。ジリジリと時間が緩く速度を落とす。

天井はおそらくアクセラレータが何をしているのか、それを理解していない。だが、天井からすれば、絶対に死なれては困るラストオーダーを、アクセラレータなんて化け物に触れられているだけで気が狂いそうになるのだろう。

「邪魔を、するな」

天井亜雄の口から泡が飛ぶ。その目が赤く血走る。アクセラレータに銃を向ける事がどれだけ無謀な事かも分からなくなっているようだった。

だが、今のアクセラレータは『反射』に力を割けない。この状態では、どうすることもできない。あのチャチな鉛玉一発当たればそれだけで彼は死ぬ。

残るコード数はたった百二。

「邪、ば、を・・・・ごァああ！！」

絶叫する天井亜雄の震える手が、握られた拳銃が、アクセラレータを睨めつける。避ける術など無い。

（まったく、考えが甘すぎギンだよ。今さら――――）

彼はただ、引き金にかかる指の動きを眺めている事しかできない。

（————誰かを救えば、もう一度やり直す事ができるかもしンねェだなンて）

乾いた銃声。天井亜雄が放った銃弾は、アクセラレータの眉間に吸い込まれるように跳んでいき、そして・・・・消えた。

そう、銃弾はアクセラレータに当たる直前で、突然消えた。

天井は何が起こったのか分からずに呆然としている。アクセラレータには物体を消す能力など無い。

しかし、アクセラレータは何が起こったのかを瞬時に理解し、そのまま作業を完了させた。

ここは学園都市だ。目の前の物体が消えたとなれば考えられる可能性はただ一つ、空間移動（テレポート）。そして、手で触れずに空間移動を起こす事ができ、なおかつ銃弾の速度を見切れ、四メートル弱の距離を銃弾が移動するたった一瞬の時間で演算を完了できる人物はこの学園都市でたった一人。

「助かった、サンキューなァ、皐月」

そう、学園都市の第六位で実質レベル五の中で二番手の実力を持つ者。完全空間移動（パーフェクトテレポーター）の炎道皐月だ。

「どういたしまして、アクセラレータが必死で走ってたから気にな

っちゃってね」

皐月は会話をしながら天井の体に物体を空間移動（テレポート）させ、天井を串刺しにして動きを封じる。

「それで此処にいたのかよォ。しっかし、よく俺が反射を使えねェって分かったなァ」

「まあ、なんだかんだいって長い付き合いだしね」

「まァ、そうだなァ」

二人はにこやかに笑い合う。

──────こうして、明らかに必要以上にボロボロにされた天井を残して事件は解決した。

騒動

アクセラレータが、ラストオーダーを助けるために必死になっていた日。当麻は平和な日常とあわただしい非日常の両方を満喫していた。

その日の朝、当麻はクラスメイトの土御門(つちみかど)元春(もとはる)と話をしながら歩いていた。

土御門は現在学園都市潜入中の多重スパイである。必要悪の教会(ネセサリウス)にも所属しており、魔術師としての腕もかなりのものだったが、学園都市で能力開発を受けたせいで、魔術を使うと体中の血管が破れてしまい、死に至る可能性もある。幸い、彼の能力はレベル０ではあるものの肉体再生の能力者なので、少し使ったくらいなら死なずに済むのだが、戦闘力ダウンはかなりの痛手だ。

――――超能力者に魔術は使えない。これは、そもそも魔術が『才能がない者』のための力であり、『超能力者』は薬や電極を使って、普通の人間とは違う脳の回路を無理矢理に拡張しているため、一般人とは作りが違うため、『才能のない人間』のために作られた魔術を使う事は出来ないのである。

そして、その唯一の例外が当麻である。当麻の力は『神を殺す力』であるため、そんな『神様が作った法則』は全て無視できる。

そんな二人が話しているのは、暗部も日常も含め、二人が共通して知っている話題だ。その話題に制限はなく、学園都市の重要機密のような周りに聞かれたらまずい話から、クラスメイトの奇行のよ

うな別の意味で周りに聞かれたらまずいような話まで色々だ。

「なあ上やん。結局『マジック』が完全に復活するのはいつになりそうなんだにゃー？」

上やんというのは土御門が当麻を呼ぶときのあだ名で、語尾に『にゃー』がついているのは普段の土御門の口癖だ。これが仕事モードに入るといきなりまじめな口調になる。あと、語尾に『ぜい』がつく事もある（例　『俺ってば嘘つきなんだぜい』など）。

「『完全に』って事はあとの二人も入れるのは、ってことか？見つかんなきゃそのままになると思うけど・・・」

「探すんなら手伝うぜい」

「まあ、適当に探すからいいよ」

そう言っていると、近くで何か騒ぎになっているのを見つけた。駆け寄ってみると、そこは戦場と化していた。地面はえぐれ、騒ぎの中心からは強い殺気が伝わってきた。

そこに立っていたのは、レベル五の二位から四位までの三人と、風紀委員（ジャッジメント）の腕章をつけ、常盤台中学の制服に身を包んだ少女の計四人だった。どうやら、第二位の垣根と第四位の麦野が喧嘩を始めて、それがあまりにも激しかったため、美琴と風紀委員（ジャッジメント）の少女が止めにはいったようだ。

野次馬達は、騒ぎの中心から離れて余波に巻き込まれないようにしている。そのうちの何人かは怖くて震えていた。そこまでしてレベル五達の戦いが見たいのかと、当麻は呆れながら戦いの中へと飛

び込んでいく。左手の包帯は、騒ぎを見つけたときにすでに外している。そして、当麻は最早戦争と呼ぶにふさわしい戦いの中心に向かって叫んだ。

「お前達、いいかげんにしろー！！」

戦っている四人も含め、周りの人間が一斉に当麻を見る。そして、元『マジック』の二人は驚いて声をあげた。

「「当麻！？」」

唖然とする周りを無視して当麻は二人に説教を始める。

「二人とも、自分の力の大きさぐらい考えろ！！周りを思いっきり巻き込みやがって！！少しは考えて行動しろ！！」

レベル五の二人に対して一方的に説教入れている光景に、周りはこの少年が殺されるのではないかとひやひやしたが、説教された二人は脅えるばかりで逆上する様子はない。

当麻が一通り説教を終えると、二人は落ち着いて話をし始めた。

「ていうか、当麻、生きてたの？」

「勝手に殺すなよ！！」

「いや、流石にあれは死んだと思ったぞ・・・」

「ああ、そうかよ。他の奴らも俺が死んだと思いこみやがってよ・・・。っと、そういや『マジック』再結成してるからお前達もどう

だ？一応これ、連絡先だから。気が向いたら連絡入れろ」

当麻はそう言って二人に紙切れを渡した。

「それじゃあ、後始末は自分でして行けよ」

当麻はそう言ってその場を後にした。・・・・土御門は後始末を手伝っていくそうだ。『お疲れ』としか言いようがない。

騒動（後書き）

当麻の力に関する記述は完全にオリジナルです。

また内容が薄く・・・・

当麻と超電磁砲四人組

当麻が、何事もなかったかのように歩いていると、後ろから四人の少女達が走ってきた。

「アンタ、ちょっと待ちなさいよ！」

その少女達の中で始めに話しかけてきたのは美琴だった。どうやらこの少女達は美琴の友人のようだ。当麻は一応レベル五の身辺は調べているので、全員の情報を思い浮かべていった。

まず、さっき美琴と一緒に戦っていた風紀委員(ジャッチメント)、レベル四のテレポーター、白井(しらい)黒子(くろこ)。次に、先ほどは戦いに参加していなかったもう一人のジャッチメント初春(ういはる)飾利(かざり)。最後に、特に特徴のないレベル〇、佐天(さてん)涙子(るいこ)。

(四人でいるってことは遊んでるとこだったたって訳か。こいつらもとんだ災難だったな)

当麻が適当に考えていると、白井が声をかけてきた。

「貴方、一体何者ですの？」

「おいおい、人を化け物みたいに・・・」

白井の高圧的な言い方に、当麻は苦笑した。

「わたくしの警告に少しも耳を貸さなかったあのレベル五二人を、いくら知り合いだったとしても、あんなに簡単に黙らせたんですも

の。少しくらい警戒されて当たり前じゃあありませんこと？」
「ホントすごかったよね〜。やっぱりこの人もレベル五なのかな〜」
「学園都市のデータバンクを調べれば何か分かるかもしれませんね。今回の事件とも無関係とは言い切れませんし・・・」
白井は警戒をとかずにいるが、一方で佐天と初春は呑気に話していた。
「俺はただのレベル〇だよ」
「ただのレベル〇？それにしてはレベル五をあっさりと黙らせましたわね〜。貴方、お名前は？」
白井は眉をひそめて更に情報を聞き出そうとしてきた。
「上条当麻。高校一年生だ」
当麻がそう答えると、初春がノートパソコンを取り出して調べ始めた。
「・・・どうやら、レベル〇というのは本当のようですね」
「・・・なら、どうしてあの二人は・・・」
白井のその疑問に答えるように、美琴が口を挟む。
「本当にアンタはふだけてるわよね。私の電撃が全く効かないくせにレベル〇だなんて」

その言葉に、白井・佐天・初春の三人は固まった。学園都市の第三位である御坂美琴の電撃がきかない？なのにレベル〇？そんなふざけた話があるのか、と。

「あんまり深入りしないほうがいい。学園都市の機密事項だからな。俺は学園都市で一番強い、もちろん第一位よりもな」

美琴以外の三人は凍り付いた。

「レベル〇だって、身体能力だけでレベル五を圧倒する事もできるんだ。まあ、血反吐を吐いても努力を続けるような荒技を使わないと無理だけどな」

佐天はその言葉に衝撃を受けた。

(自分はレベル〇だから弱いって思ってたけど、違ったんだ。レベルが上がらなくても、出来る事なんて沢山あるんだ・・・)

「・・・そんな荒技、下手すれば死にますわよ？」

「人間は、死ぬ前にちゃんと倒れるから大丈夫だよ」

血反吐を吐いて倒れるまで頑張って、なのにこんなにも物腰が低くて優しげで、この少年はどうしてこんなにも強いのだろうか？、と少女達は思った。この少年が体験してきた苦痛は想像することすらできない。この少年はどんなに重いものを背負っているのだろうか？

どうしてこんなに頑張れるのだろうか？

「それじゃあ、俺はもう行くぞ」

そう言って立ち去る少年を少女達は止めることは出来なかった。訊きたいことは沢山あるけど、軽々しく訊いてはいけないものだと思って、自分の胸にしまい込んだ。

当麻と超電磁砲四人組（後書き）

グダグダですが、「とある科学の超電磁砲」との絡みを入れてみたかったんです。

後悔はしていはせん！！・・・反省はしています。すいませんでした。

沙由理との日常風景

当麻が少女達と別れてから歩いていると、少し行ったところで沙由理を見つけた。

「よう、沙由理」

後ろからこっそり近づいて声をかけてみた。

「ひゃい！？上条先輩！？」

沙由理はすごく動揺していた。当麻は、「可愛いな」と思いつつ再び声をかけた。

「慌てすぎだ、馬鹿」

「はぅ～」

沙由理は真っ赤になって俯いている。

(つーかいつもは急に抱きついてくるくせに不意をつかれただけでこれかよ)

当麻がそう思っていたら、沙由理が何やらブツブツと呟いているのが聞こえた。

「うふふ、計画通り。『ドキリ！！純情で可愛い後輩☆作戦』大成功・・・」

「・・・・、聞こえてるぞ」

「えっ・・・・。あ、いや、その、これは、その〜、すいませんでした！！」

当麻がつっこみを入れると、沙由理は戸惑ってすごい勢いで謝ってきた。

「別に良いけどよ・・・・」

「ふう・・・良かった〜。あっそうだ、上条先輩、今から先輩の家におじゃましてもよろしいですか？久しぶりに私の手料理を食べてみてくださいよ」

「いいぜ。どれだけ上達してるのか楽しみだ。あと、家には信じられないほど大量に食う居候がいるから食材は多めにな〜」

当麻がそう言った瞬間、沙由理がすごい勢いで詰め寄ってきた。

「上条先輩！まさか女の子じゃ無いでしょうね！？」

「あ〜。女の子だけど・・・・」

「む〜」

当麻は、あからさまに機嫌が悪くなった沙由理に事情を説明した。

「・・・仕方ないですね。まあ元々、恋人でもない私には口出しする権利もありませんしね」

「まあ、別に駄々をこねる程度の『甘え』はあってもいいけどな。・・とりあえず食材買いに行くか」

そう言って、当麻は沙由理と一緒に食材を買うためにスーパーに向かって歩いていくと、当麻にとっては本日二回目となる、現在進行形の事件の現場を通りかかった。

どうやら、銀行が強盗に襲われているようだった。当麻は、ふと思い出す。そう言えば皐月と再会した時に襲われていたのもこの銀行だったな、と。

強盗が飛び出してきて、車で逃走しようとしている。そしてその車は当麻の方に向かってきた。

「・・・・めんど」

当麻はそう呟いて左腕の包帯を外し、力を解放した。そして、当麻が今回使う力はベクトル操作のレベル五、ちょうどアクセラレータと同じ力だ。当麻は、その力で、ぶつかってきた車の持つ運動エネルギーのベクトルを下へ向けた。中の人間が怪我をしないように細かい調整もしておいた。

その完璧な結果を見て当麻は満足したような表情をして、ふとあることに気がついた。

「やべ、やりすぎた」

人間に怪我が無いようにしたものの道路にはヒビが入ってしまったし、何より不用意に目立ちすぎた。

「沙由理！逃げるぞ！！」

「あ、はい！！」

当麻は沙由理の手を引いてスーパーの方へと走った。来た道を引き返したほうが簡単に逃げられたのだが、一旦戻って迂回するのが嫌だったのでこの方向を選んだ。

身体能力が並はずれて高い二人は、どうにか事情聴取を求めるアンチスキルをまく事が出来た。

「それにしても、上条先輩があんなミスをするなんて珍しいですね」

「ちょっと気を抜きすぎてたな。まあ、別に人間誰だって失敗ぐらいするさ。それとも、俺は人間に見えないか？」

「いえ、ただ少し意外だっただけです。いつもはあんなにすごいのに・・・。でもやっぱり上条先輩でも失敗したりするんですね。少し安心しました」

「安心？」

「はい。上条先輩が本当に完璧で何でも失敗せずにこなしちゃうような人だったら私なんて必要ないじゃないですか」

なるほど、と当麻は頷いた。確かに沙由理にとっては深刻な問題なのだろう。

「でもさ、やっぱりいくら完璧になれたとしてもやっぱり側にいてくれる人がいないと寂しいぞ？お前も自分が完璧な人間になれても

俺がずっと側に居て欲しい、って思ってるんじゃないか？」

「そうですね。結局、好きになってもらえればいいってだけなんですね」

「ああ。だから、何も心配する事はない」

当麻はそう言って、沙由理の頬にそっと口づけした。

昼食

当麻と沙由理はスーパーで食材を買い、当麻の住む寮へと向かった。そこに着いた頃にはもう十一時半を過ぎていた。今からご飯を作り始めたらちょうど良いぐらいの時間にできあがるだろう。

「あ〜、なんか緊張します」

「何に対してだよ・・・」

「う〜ん。二人っきりじゃないのでいきなり襲ったりとかできませんね〜」

「お前は何の心配をしてるんだよ・・・」

当麻は呆れながらドアを開けて部屋に入っていった。

「とうま、おかえり・・・って！！とうま、その女の子は一体なんなの？」

インデックスは当麻が女の子を連れてきたのを見て訝しんだ。

「こいつは神童沙由理。俺の仲間だよ」

「どうも、初めまして」

沙由理は礼儀正しく挨拶した。

「とりあえず、今日はこいつがご飯をつくってくれるから。ちなみ

にかなり旨いぞ？」

「本当！？よろしくなんだよ！！」

インデックスは態度をころりと変えた。

沙由理は苦笑しつつも部屋に入ってご飯を作り始めた。できあがった頃にはもう十二時を過ぎていた。

「「「いただきます」」」

三人は一斉に食べ始めた。

「美味しい！！これ、すごく美味しいんだよ！！」

インデックスが賞賛の言葉を述べた。しかし、沙由理はそれを全く聞いておらず、当麻の方を凝視していた。

「上条先輩、どうですか？」

「ああ、美味しいよ。また一段と旨くなったな」

当麻はそこまで言ってから少しいたずらしたくなった。

「これなら、毎日食べたいぐらいだ」

「ふにゃ！？」

沙由理は驚いて奇声を発した。

「わっ、私はいつでも作りに来ますよ。よければ将来も、一生上条先輩のご飯を・・・」

戸惑う沙由理を見て、当麻は吹き出してしまった。

「ぷぷっ、ははは。ちょっとからかってみただけだ。真に受けすぎだっつーの。・・・でも本当にそれぐらい美味しかったぞ。ありがとな」

「ううっ。あまりからかわないでくださいよ。本気にしちゃうじゃないですか。・・・でも、とりあえず満足してもらえたみたいで良かったです」

沙由理はそう言って微笑んだ。それを見た当麻の表情も自然とゆるむ。

しかし、いつまでも甘い雰囲気でいるとインデックスにご飯を食べ尽くされてしまうので、二人もとりあえず昼食を食べ始めた。

夏休み終了

当麻は、昼食を食べ終わった後、あることを思い出した。

「そう言えば、違法薬物の取引を潰しに行かなきゃいけないんだった・・・」

「じゃあ、二人で行きましょうか？どうせ大した相手じゃないんでしょう？」

「そうだな。インデックス、俺等はちょっと行ってくるから」

当麻はそう告げ、二人で薬物の取引場所へ向かい、そこにいた相手を瞬殺した。

「上条先輩、こいつ等が取引していた薬物っていったい何なんですか？」

沙由理は液状の薬物が入った瓶を手に取りながら尋ねた。

「惚れ薬だ。飲んだ後一番始めに見た異性を好きになるらしい」

「へっ、へ～そっ、そうなんですか～」

沙由理はそう言いながら手に持っていた瓶をポケットに入れた。

「おいこら、今ポケットに入れた瓶を出せ。てめえ絶対俺に使う気だろ」

「・・・分かりました」

沙由理はそう言って渋々ポケットから瓶を取り出して当麻に渡した。

「全く、油断も隙もない」

当麻はそう言ってため息をついた。

しかし、当麻は気付いていなかった。実は沙由理が惚れ薬の入った瓶をもう一つ隠していたことに・・・。

「まあいい。とりあえず、ちょっと一息ついていくか・・・。喫茶店でも寄ろうぜ」

当麻はそう言って喫茶店へと向かった。

〜喫茶店にて〜

「上条先輩、公共の場で機密書類を読むのはやめた方が良いと思います」

「どこで読んでも同じだ。誰かに読まれない限りはな」

「一回ジュースをぶっかけられて読めなくなった事があったじゃないですか・・・」

「俺の力でいくらでも元に戻せるんだ。問題はない」

「それでも、何だか納得いかないんですけどね・・・」

沙由理はそう言いながら、さっき手に入れた惚れ薬の事を考えていた。

（う～ん。今使うと、明日から学校だから夜遅くまでは遊べないし、次の土曜日に使おうかな。・・・どうやって飲ませよう？何かに混ぜるのもいいけど、上条先輩が相手だと気付かれるかもしれないし・・・。よし、思い切って口移しで無理矢理飲ませちゃおう！！）

「・・・沙由理、何かたくらんでないか？」

当麻が怪しそうに沙由理を見た。

「いっ、いえ。ちょっとこの後一緒に遊べないかな～と思いまして・・・」

「ん？何だ、そんなことか。別にいいぞ」

「それじゃあ、早く行きましょう！！」

「おいおい、そんなに慌てるなよ」

こうして、当麻の夏休み最後の日は過ぎていった。

夏休み終了（後書き）

惚れ薬によるイベントは八巻の後になります。色々と苦しくなってきたので、六巻のところをやった後、七巻を飛ばして八巻の部分を書いて、惚れ薬の話を書いて終わりにしようと思っています。

舞台裏

学園都市には窓のないビルがある。

ドアも窓も廊下も階段もない、建物として機能しないビル。空間移動を使わない限りは出入りも出来ない密室の中心に、巨大なガラスんも円筒器は鎮座していた。

その巨大な強化ガラスの円筒の中には赤い液体が満たされている。広大な部屋の四方は全て機械類で埋め尽くされ、そこから伸びる数千万ものコードやチューブが床を這い、中央の円筒に接続されていた。

窓のないその部屋はいつも闇に包まれていた。ただし、円筒を遠巻きに取り囲む機械類のランプやモニタの光がまるで夜空の星のように瞬いている。

赤い液体に満たされた円筒の中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さに浮かんでいた。

学園都市統括理事長『人間』アレイスター。

それは男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも囚人にも見える。その『人間』は自分の生命活動を全て機械に預けることで、計算上ではおよそ千七百年もの寿命を手に入れていた。脳を含め全身はほぼ仮死状態に近く、思考の大半も機械によって補助している。

(・・・・、さて。そろそろか)

アレイスターがそう思った瞬間、タイミングを合わせたかのように円筒の正面に、唐突に二つの影が現れた。一人は小柄な空間移動能力者の少女、そしてもう一人は彼女にエスコートされるように手をつないだ大男だ。

空間移動能力者は一言も言葉を発しないまま会釈をすると、再び虚空へ消える。

闇の中には大男だけが取り残された。

その大男は短い金髪をツンツンに尖らせ、青いサングラスで目線を隠した少年だった。アロハシャツにハーフパンツという、こんな場所にそぐわない格好をしている。

土御門元春（つちみかどもとはる）。イギリス清教の情報をリークする学園都市の手駒だ。

「警備が甘すぎるぞ。遊んでいるのか」

スパイである土御門は雇い主であるアレイスターに向かって苛立った口調で言った。スパイであるものの、土御門はアレイスターの従属的な部下ではないのだ。

「シェリー＝クロムウェル。こいつは流れの魔術師ではなく、イギリス清教『必要悪の教会』の人間だ」

土御門はアレイスターに向かって言った。本来、魔術師は同じ魔術師が裁かなければならない。『科学』と『神秘』それぞれが独占する技術の内、片方が一方的に漏れればパワーバランスが崩れる。

ゆえに、技術が『漏れるかもしれない』と思われるだけで両者の間に亀裂ができあがる。

当麻も学園都市の『裏』の一部の人間以外には、魔術を使えることを知られていない。知られてはいけないのだ。

当麻が戦いに参加すればその時点でパワーバランスなど概念そのものから消え去っているようなものなのだが、このさいそれは関係ない。

「それは知っているよ。しばらくの間『ウルフ』が活動していなかった。そのせいで、イギリス清教側から少しなめられているようなのでね。これを利用しない手はない」

『ウルフ』。それは、学園都市の『裏』の人間が使っているコードネームのようなもので、当麻のことを指す言葉だ。

「上条当麻を利用する気か。正気とは思えないな。アイツを怒らせたらどうなるかぐらい分かるだろう？」

「だからこそだよ。彼は戦争を好まないからね。必要のない争いを産まぬためだ」

アレイスターはそう言い、土御門に裏工作を任せた。

ちくしょうが、と土御門は吐き捨てる。

詰まる所、彼はいつもそんな仕事ばかりしていた。

夏休み明け

当麻は眠気を振り払いながら、めんどくさそうに二人分の朝食を作る。そんなにめんどくさいのなら冷凍食品にすれば良いのだが、健康に気を遣っているので手作りだ。

当麻は料理を終えると、速攻で食事を済ませ、始業式に必要なものを鞄へ放り込んでいく。宿題は、時間がもったいなかったので、当麻の筆跡を真似る事の出来る、アクセラレータと沙由理に手伝ってもらった。

細かいベクトルまで計算して筆跡を真似ているアクセラレータはともかく、沙由理が当麻の筆跡を真似る事ができるのは不思議で仕方なかったが、何となく『知らぬが仏』という言葉が頭に浮かんだので訊かないでおいた。

「とうま、ホントにがッコー行っちゃうの？」

「あ〜。そっか今までは小萌先生に預けたりしたけど、新学期始まるとお前ずっと留守番になっちまうのか」

ちなみに、小萌先生には『訳ありで預かっている』とだけ説明している。その説明だけで何も詮索せずに了承してくれているのでとても助かっている。

「とうま、早く帰ってくる？」

「そうだな、分かった。帰ったら一緒にどこか遊びに行くか」

当麻の言葉に、インデックスはとても素直な笑みを浮かべた。

当麻は少し複雑な気分になる。今の彼女の人間関係は全て当麻を経由して構築されている。当麻は、『ちょっと考えておくか』と思いつつとりあえずその問題は保留にした。

「じゃ、行ってくる」

「うん、行ってらっしゃい」

インデックスは笑みを浮かべてそう言った。

当麻が家を出て、五分でインデックスは退屈になった。

当麻の後を追いかけたいが、迷惑になるかもしれないと思い、ふと大事なことを思い出した。

「………、あれ？とうま、お昼ご飯は？」

呟いてから、インデックスの顔がちょっと青ざめた。

彼女に料理を作るようなスキルはない。スナック菓子の類も、三毛猫が片っ端から袋を破って食い散らかしてしまうため、買い置きはもうない。

「ど、どうしよう。未曾有の大ピンチかも」

思わず呟いてから、彼女は玄関へと視線を投げた。

薄いドアの向こうには当麻のいる外の世界が広がっている。

クラスメイトとの日常

当麻が学校の教室に入ると、クラスメートの青髪ピアスが話しかけてきた。

「カミやん。夏休み中遊びに誘ってもずっと『用事がある』言うて来いへんかったけど、どないしてたん？」

「ん～。まあ、色々」

暗部の話をするわけにもいかないので、当麻は適当に流した。すると、クラスの女子の一人が話しかけてきた。

「ねえ、上条君。もしかして、夏休み中に彼女ができたの？」

その質問に、クラス中が反応した。

(やれやれ、もてるってのも考え物だな)

当麻は普段から他人に優しく、色んな人を助けたりもしているので学年を問わずに有名な人気者で、一学期の間だけでも、告白された回数は二桁を超えている。

「彼女が出来た訳じゃないけど、ちょっと中学時代の友達と再会してな」

「へえ、それって女の子？」

「ん～？女子が二人に男子が一人・・・いや、女子が三人に男子が

二人か」

当麻は、『そういえば沈利と帝督とも再会できたんだったな』と思いながら答えた。

「ふ～ん。本当に友達の集まりなんだ、彼女とかじゃないんだね？」

「ああ。・・・あっ、そう言えばデートはしたな」

当麻が、ふと思い出したように言うと、そのセリフにクラス中が反応した。

「ちょっと！上条君！！それ、どういうこと！？」

「カミやん！！裏切ったな！！」

「そんな・・・。私じゃだめなの？」

ギャーギャーとクラス中が騒ぎ出す。

「落ち付けって。相手はさっき言った中学時代の友達の一人だよ。昔から、ことあるごとに『デーとしてください』って言ってくるんだよ」

「え～と、それって、その子は上条君のことが好きなんじゃあ・・・」

「ん？そうだよ。そいつはいっつも唐突に告白してくるし」

当麻のセリフに、クラス中が固まった。

「えっと、上条君はその子を振ったの？」

「ああ。もう百回以上になる」

「それって気まずくなったりとかは・・・」

「今更そんなことにはならないし、気まずくなってもアイツは無理矢理ひっついてくるから関係ないよ」

クラス中が、『こいつ、意外とひどい』と思った。

「それで、その子はどこの学校の子なの？」

「常盤台中学校」

「へ？」

クラス中に沈黙が流れる。

「「「「「はあ!?」」」」」

こうして、当麻はクラス中から質問攻めにあうのであった。

☆　☆　☆　☆　☆

「はいはーい。それじゃあさっさとホームルームを始めますよー」

小萌先生が教室に入ってきた頃には、当麻への質問攻めも終わっていた。

「えー、出席を取る前にクラスのみんなにビッグニュースでーす。なんと今日から転入生追加ですー」

おや？とクラスの面々の注目が小萌先生に向く。

「その転入生は何と三人もいてその内の二人はなんとレベル五なのだそうです。その二人には話しかけにくいかもしれないですけれども仲良くしてあげてくださいね。ちなみに後の一人は女の子ですー。おめでとう野郎共ー、残念でした子猫ちゃん達ー」

おおおお！！とクラスの面々が色めき立つ。

そんな中、当麻は嫌な予感しかしていなかった。普通の女の子のほうはともかく、レベル五の方は、知り合いでないなのはこちらのことを知らない第七位だけなので、必然的に一人は知り合いになるし、第七位が来るのは余計に嫌だ。

「とりあえず顔見せだけでーす。詳しい説明とかは始業式が終わった後にしますからねー。さあ、転入生ちゃん達、どーぞー。

小萌先生がそんなことを言うと、教室の入り口のドアがガラガラと音を立てて開かれた。一体どんな奴なんだと当麻が視線を向けると、そこに、三毛猫を抱えた白いシスターが立っていた。

「はあ！？」

クラスメイトとの日常（後書き）

転入生達

当麻は、予想外の展開に頭が真っ白になっていた。

とりあえず一人はまともな人がくると思ったのにどうしてインデックスが出てくるのか不思議でならなかった。

（いや、落ち着け。朝のやりとりから考えてもこいつが転入してくるはずがない。・・・そうか、こいつは『始業式だから昼までには帰れる』っていうことを知らないんだな。だから昼ご飯が食べれないと思ってこっちに来たって訳か）

当麻がそう考えている内にインデックスは小萌先生に教室から追い出されていた。

（とりあえず、後で探すか・・・）

彼女と入れ替わりのように、長い黒髪の少女が入ってくる。

「ちなみに、本物の転入生は私。姫神（ひめがみ）秋沙（あいさ）」

（吸血殺し（ディープブラッド）の少女だっやな。とりあえずまともそうなやつで良かった）

「レベル五のお二人さんも早く入って来てくださいです～」

小萌先生に言われて残りの転入生が教室へ入ってきた。

「俺ァレベル五第一位の一方通行（アクセラレータ）だ。よろしくなァ」

「私はレベル五の第六位の完全空間移動（パーフェクトテレポーター）。名前は炎道（えんどう）皐月（さつき）、よろしくね」

二人の自己紹介を聞いて、クラス中がざわめいた。「第一位だって！？」や「第六位の能力名なんて初めて聞いた」など、学園都市の最上位の能力者にみんな興味津々のようだ。

当麻は、自己紹介を終えた二人に対して自分の席を立って声をかけた。

「おいこらそこのレベル五共、ちょっと話がある。っつうかとっとと説明しろコラ」

当麻は、女子が思わずみとれてしまったほどの綺麗な微笑みを浮かべながら、その穏やかな表情に似合わないセリフを放った。レベル五二人に対する高圧的な態度に、クラス中（未だに当麻の微笑みの余韻に浸っている女子を除く）が硬直した。

しかし、レベル五の二人はそれ以上に怖がっていた。当麻が味方に対して笑顔で高圧的な態度を取るときはすごく怒っている時だ。

二人は逆らう事も出来ずに、当麻に連れられて廊下へでた。

「さてと、どういう事なのか説明してもらおうか？」

「統括理事のほぼ全員から、『お願いだから少しは行動が把握しやすいように同じ学校にいてください』ってたのまれたのよ」

「俺等がちょっと暴れたら大惨事だからなァ。連中は相当ビビってるみたいだぜェ」

当麻は「なるほど」と相づちを打ってから続けた。

「じゃあ、なんで俺に何も言わなかったんだよ」

「頼まれたのが昨日で、手続きは統括理事達がすでに済ませてたのよ」

「はあ？あいつらも相当せっぱ詰まってたんだな・・・。分かったもういい。教室に戻ろう」

当麻達は教室に戻り、何をしてたのかと訊いてくるクラスメイト達や小萌先生を何とかごまかして席に着いた。

謎の少女（前書き）

久しぶりの投稿で～す。投稿が滞ってしまい申し訳ございませんでした。

インデックスは教室から追い出された後、ゆっくりと廊下を歩いていた。

彼女の手には二千円札が握られていた。小萌先生に『もう何だってこんな所にいるんですかほらもう早く帰ってください知らない人について行っちゃダメなのですよほらほらタクシー呼んでくださいねー』と無理矢理渡されたものだった。

小萌先生がなぜあんなに早口で区切れなく話せたのか疑問に思ったりもしたが気にしたら負けのような気がするので置いておく。

と、そんな彼女は食堂の横に差しかかった。

中から聞こえてくるジャージャーという炒め物の音や、漂ってくる美味しそうな匂いに、腕の中の三毛猫がみゃーみゃあーと鳴き始め、インデックスノア氏がピタリと止まる。

ちなみにこの三毛猫はインデックスが勝手に拾ってきて飼い始めたもので、寮の管理人に見つからないようにしているのだが、インデックスも見つかったらまずいのは同じなので今更それくらいでは特に変化はない。

「・・・・・・、おなか減った」

彼女は食堂へ入り、食券販売機で食券を買おうとしたが、お金を入れてからボタンを探そうとしたときに、液晶モニタのタッチパネ

ルを押せばいいということが分からずに途方に暮れてしまった。

と、その時、彼女は背後から見慣れない少女に肩を叩かれた。

「あの・・・・、ボタンを押さなくちゃダメなのよ」

「はえ？」

「だから、モニタのボタン・・・・」

ボソボソした声で言われて、少女の指が食券販売機を指している事にインデックスはようやく気付く。その指の先を視線で追っていくと、販売機のアームについた液晶モニタにたどり着く。

インデックスは、未知の言語を使う異国で迷子になった子供のような顔をして、

「ボタンって、だから自販機にボタンなんてついていないんだよ」

「えっと・・・・」少女は少し困ったように、「だから、モニタを直接指で触ればいいの・・・・。知らなかった？あ、あの、だから、そんな泣きそうな顔しないで」

「ウソだもん。私知ってるよ。テレビに触ったって中の人には何の変化もないもん」

「・・・・・・」

少女は無言で販売機立つと、モニタの端にある取り消しボタンを押す。

すると、飲み込まれたはずの二千円札がはき出されてきた。インデックスは思わず目を丸くする。

「な、なにそれ？」

「だから・・・・・モニタを指で触れば良いだけなんだけど・・・・・」

「す、すごい。このテレビ、中と繋がっているんだね！」

「あの・・・・・これ、テレビじゃ・・・・」

はしゃぐインデックに、少女が苦笑していると、後ろから足音がした。

「お～い。インデックス何やってんだ？」

「あ、とうま！」

インデックスは当麻を見て、嬉しそうな表情を浮かべた。

正体不明（カウンターストップ）

「悪い、今日は始業式だから昼までには帰れるって言っとくの忘れてた」

「あ、そうなんだ。それは安心なんだよ」

ふと、当麻はさっきまでインデックスと話していた少女を見た。

「なあ、インデックス。その子ってもしかして風斬氷華か？」

「えっ、私は確かに風斬氷華って言う名前だけど、どうしてそれを・・・・」

風斬氷華。その少女は正体不明（カウンターストップ）と呼ばれている。彼女はＡＩＭ拡散力場の集合体である。ＡＩＭ拡散力場とは能力者が無意識のうちに伝包囲へと放出してしまう微弱な力のことで、それによって『人間らしいデータ』が全て揃うと、そこに人間がいるような状態になる。

ＡＩＭ拡散力場の街である虚数学区は学園都市にとって重要なものであって、風斬氷華はその虚数学区のカギと言われている。

「まあ、その説明はゆっくりするとして、とりあえず、初めまして俺は上条当麻だ」

「あっ、えっと、よろしく」

風斬はそう言って、握手をしようと右手を差し出した。

「握手をするなら左手でだ。俺の右手に触ったらお前は死ぬぞ」

「えっ！？」

突然言い出した当麻に、風斬は戸惑ったがとりあえず言われた通りに左手で握手をした。

「さてと、それでさっきの話なんだが・・・」

当麻はそう言って、風斬の正体と自分の持つイマジンブレーカーについて話した。

「そんな・・・。私が人間じゃないだなんて」

「そんなの、うそなんだよ！！」

絶望する風斬と反発するインデックス。当麻はそんな二人をなだめるように続ける。

「今言ったことは事実だ。だけど、そもそも人間らしい心を持っているのなら俺は人間としか認識しない。別に人間でなきゃダメな理由なんて何処にもないだろ？インデックスだって風斬が人間じゃ無くても友達でいたいと思うだろう？」

「当たり前なんだよ！！」

当麻の問いかけにインデックスが即答する。

「でも、今の話が本当なら私は怪我をしても何ともないような化け

物なんでしょう？」

「ああ。そうだな」

風斬の弱々しい問いに当麻は即答し、その後に続ける。

「でも、この街ではそんなのは珍しくもない。そのぐらいなら俺の方がもっと化け物じみてるし、友達には『原爆が直撃しても傷一つつかない』っていうのがキャッチコピーの超能力者もいる。どちらが化け物かって言ったら答えは明らかだろ」

「そっか・・・。そうなのかな・・・・」

「ああ。そうさ」

当麻はとりあえず風斬が納得してくれたことに安心して、食堂の入り口の方に呼びかける。

「二人とも、盗み聞き何てしてないで出てこい」

当麻がそう言うと、アクセラレータと皐月が出てきた。

「誰が化け物だっつーの。俺はお前と違って人間捨てるほどじゃねェぞ」

「ああ、悪い。ものの例えだ」

軽く言葉を交わし、その場にいるメンバーを全員紹介して『全員で遊びに行こう』と誘った。

ゲームセンターに行こう

当麻達は、始業式が終わるとファミレスで食事を済ませ、ゲームセンターへと向かった。

その途中で、当麻はふと思い出して言った。

「そういや、沈利と帝督も『マジック』に復帰するし、誘ってやるか。あと沙由理も呼んでおかないと後でばれたら文句を言ってきそうだな」

「あァ、そうだなァ。つーかアイツ等も復帰すンのかよ。足手まといだろ」

「一応レベル五なんだから足手まといにはならない思うわよ」

当麻は二人のコメントを聞きながら三人にメールを送った。すると、十秒も経たない内に沙由理から返信が来た。

「え～と、『絶対行きます！！』だってよ。相当急いでるな、この文面は・・・」

「あらあら、あの子らしいわね」

楽しそうに話をする三人の後ろでは、インデックスと風斬が楽しそうに会話をしている。五人で歩いているが、当麻は『この全員で会話をするのは無理』と判断したのでこの状況を放置している。

この五人がゲームセンターについたときには、すでに沙由理が入り口で身だしなみを整えていた。

「あっ、上条先輩！早く行きましょう」

沙由理がそう言って当麻の手をつかんだとき、垣根と麦野の二人がちょうどゲームセンターの入り口に到着した。

「沙由理は相変わらずってところかしら？久しぶりね、みんな」

「ホント、懐かしいなこの風景」

「久しぶりに全員揃ったな。それじゃあ、俺等は話があるからインデックスと風斬は先に遊んどいてくれ」

当麻がそう言うと、インデックスは風斬の手を引っ張って走っていった。当麻はそれを確認してから、さっきいなかった三人に風斬の正体について話した。

そして、一通り話し終えるとゲームセンターの中へと向かった。

「へへへ、俺のダークマターに常識は通用しねえ！！」

「お前はバカか、ゲームに能力は関係ねぇだろうがよ」

垣根とアクセラレータが色んなゲームで対戦しているが、垣根はまだ一勝もしていない。普段からベクトルの計算をしているアクセ

ラレータにとってはゲームを操作するときも全て細かい計算で行うのが当たり前で、そこまで計算し尽くされた操作をする相手に勝つことはとてつもなく困難である。

しかし、それでも垣根は懲りずに勝負を挑む。そして、皐月はそれを楽しそうに観賞し、麦野は気まぐれで適当に色んなゲームを楽しみ、当麻は色んな景品を獲得していき、沙由理は当麻に引っ付いている。

『マジック』のメンバーが全員揃ったときはだいたいこんな構図になる。インデックスと風斬は二人で楽しんでいるようなので放置しておく。

こうして、ここに遊びに来たメンバー全員がこの時間を楽しんでいた、

事件発生（前書き）

久しぶりの投稿です。

事件発生

当麻達がゲームセンターでかなりの時間を消費した頃、周りがいきなり慌ただしくなった。

「マジック」のメンバーが真剣な顔になる中、当麻とアクセラレータだけは何が起こっているのか分からなかった。

「なあ沙由理、何があったんだ?」

「テロリストだそうです。念話能力(テレパス)で伝えているので上条先輩には聞こえないんですね。多分一方通行(アクセラレータ)も能力を反射しちゃって聞こえてないいんじゃないでしょうか」

「なるほどな、じゃあボランティア活動でもやるとするか」

当麻はみんなと合流し、とりあえずインデックスと風斬を避難させてからテロリストをボコろうという方向で話を進めた。そして、出口に向かおうとしたとき、何もないはずの壁から声が聞こえた。

『見いつっけた』

当麻達がそちらに視線を向けると、ちょうど当麻の目線の高さの辺りに掌サイズの茶色い泥があり、その泥の中央に人間の眼球が沈んでいた。ギロギロと、眼球はカメラのレンズのようにせわしなく動く。

風斬は、それを見て、あまりの現実感のなさにキョトンとしていたが、他のメンバーはそれを眺めて冷静に分析していた。

『うふ。うふふ。うふうふうふうふふ。禁書目録に、幻想殺し（イマジンブレイカー）に、虚数学区の鍵。どれがいいかしら。どれでもいいのかしら。くふふ、迷っちゃう。よりどりみどりで迷っちゃうわぁ』

女の声は妖艶だが、どこか錆び付いていた。煙草か何かで喉を潰した歌姫を連想させる、退廃的な声は一転、

『ま、全部ぶっ殺しちまえば手っ取り早えか』

場末の酒場でも聞かれないような粗暴な声色へと切り替わる。

それに対し、当麻は

「うるせえよ」

魔術師に対して、まるでクラスメートとじゃれ合っているかのような軽いノリでそう返すと、右手でその眼球を叩いた。幻想殺し（イマジンブレーカー）の効果を受け、その眼球は跡形もなく消え去った。

少しして、御坂美琴と白井黒子がやってきた。

「何をしていらっしゃるんですの？早く逃げた方がよろしいですわよ」

「いや、俺はテロリストを倒しに行くつもりだからこの二人を頼む」

当麻はそういってインデックスと風斬を指した。

「はあ！？そんなのはアンチスキルに任せときなさいよ！！」

御坂はそう言って当麻を連れて行こうとした。しかし、当麻は首を横に振った。

「これはアンチスキルごときが解決できる問題じゃあ無いんだ。俺らがやらなきゃいけないんだよ。まあ、レベル五がこれだけ集まってるんだからすぐに終わるだろうけどな」

「なら、せめて私も・・・」

「これは学園都市の暗部にも関わってくるかもしれない問題なんだ。踏み込んだら戻れなくなる。学園都市の暗部では、大切な人の命を握られて脅されることになるかもしれないし、人殺しを強要されることが当たり前なんだ。だから、お前はそこに足を踏み入れようとするんじゃねえよ」

当麻がそう言うと、御坂は黙ってしまった。

「なンかしけた空気だなァ。危険な事をしに行くわけでもあるまいし」

「まあ、十分非日常の分類には入るな」

当麻と一方通行（アクセラレータ）は適当に言い合いながら、出口とは逆の方向へと歩き出す。『マジック』の他のメンバーもそれに続いて歩き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1708p/

とあるチートな上条当麻【更新停止】

2011年11月9日04時54分発行